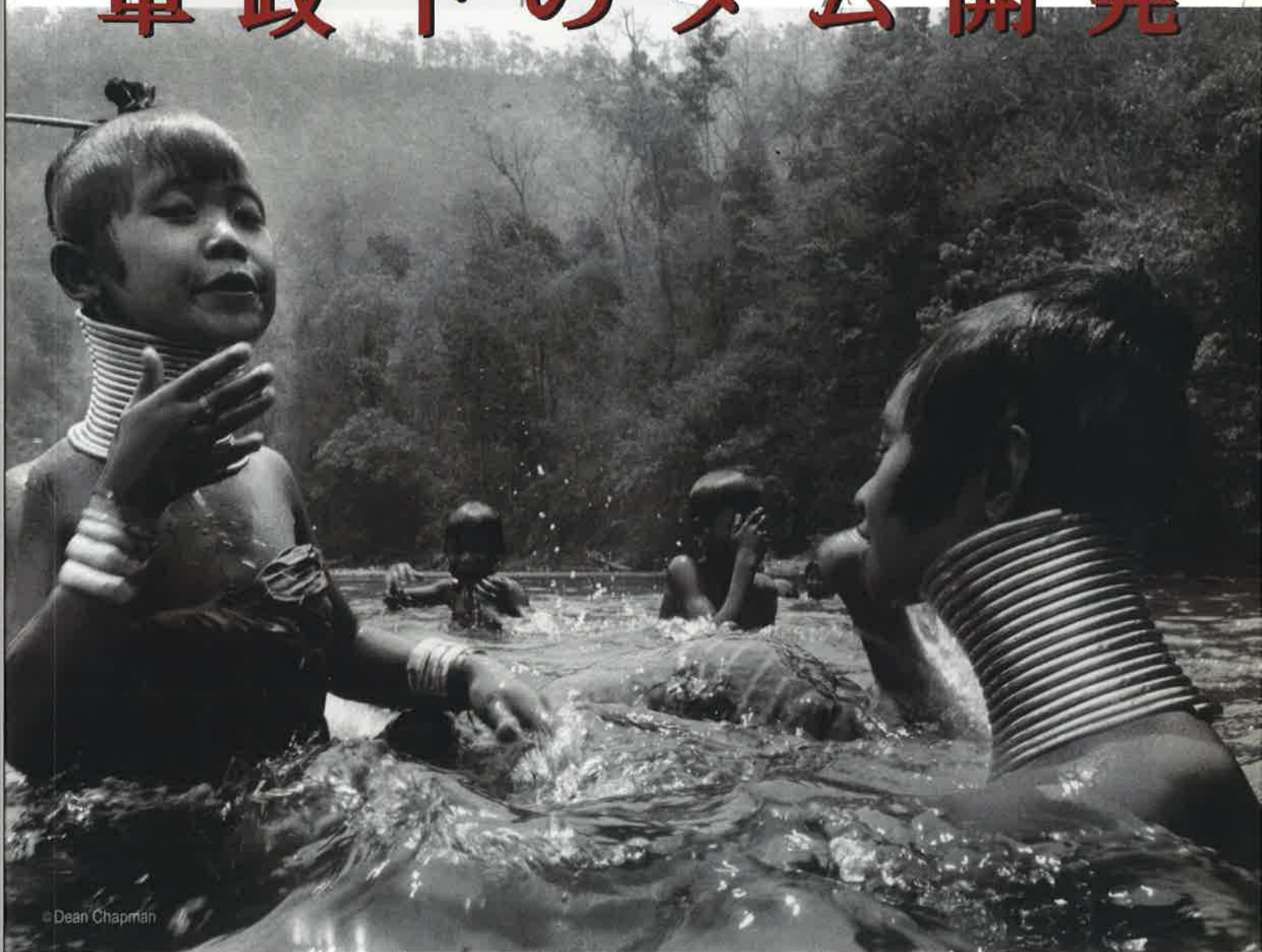


ビルマ 軍政下のダム開発



カレンニーの教訓、バルーチャウンからサルウィンへ

カレンニー開発調査グループ

日本語版発行 ビルマ情報ネットワーク、特定非営利活動法人メコン・ウォッチ
日本語訳・監修 久保忠行、ビルマ情報ネットワーク

ビ ル マ

軍 政 下 の ダ ム 開 発

カレンニーの教訓、バルーチャウンからサルウィンへ

目次

序文	VII
要旨	1
第1章 序論と背景	3
第1節 はじめに	5
第2節 方法論	5
第3節 背景	6
第1項 ビルマ	6
ビルマ独立以降の軍事政権	6
ビルマの水力発電開発	6
第2項 カレンニー州の概観	7
カレンニー州の歴史概略	8
カレンニー州の軍事化	8
第3項 恐怖にさらされる人々	9
地図2 カレンニー州のビルマ軍基地(1990年以前)	10
地図3 カレンニー州のビルマ軍基地(1990年以降)	11
大規模な強制移住	12
国内避難民(IDP)と難民の現状	13
表1 カレンニー州の国内避難民(IDP)数(2005年)	13
人権侵害	13
地図4 1996年の強制移住作戦以前に存在した村(ポーン川・サルウィン川以東)	14
地図5 1996年の強制移住作戦以後に存在した村(ポーン川・サルウィン川以東)	15
「停戦」を通じた分割統治	16
最近のビルマ軍の軍事活動	16
第4項 極めて豊かな生物多様性	16
地図6 大メコン河地域内の豊かな生物多様地域	17
地図7 インレー湖とモビエ貯水池	18
森林	19
鳥類	19
哺乳類と爬虫類	19
第2章 バルーチャウン水力発電事業	21
第1節 バルーチャウン水力発電事業とは	23
第2節 バルーチャウン水力発電所	24
第1項 発電所の各部分	24
第2項 着工スケジュール	24
第3節 だまされた住民へメリットのない建設事業	25
第1項 建設前後の水の使用	26
Box1 ドータチャダム	27
第2項 電力の行き先	28
地図8 バルーチャウン水力発電所建設による影響	29
第4節 バルーチャウン水力発電所建設に伴う強制移住	30

第1項	モビエダムと第2発電所建設に伴う強制移住と土地の接収	30
第2項	発電所警護にあたる第72歩兵大隊駐留にともなう強制移住	30
	表2 強制移住および立ち入り禁止対象となった村落、世帯数と人口	31
第3項	第1発電所建設にともなう強制移住	32
第4項	立ち入り禁止区域宣言にともなう強制移住	32
第5節	バルーチアウン水力発電所周辺の兵員拡大にともなう人権侵害	32
第1項	強制労働とポーター	33
	Box 2 ロピータに駐留するビルマ軍兵士の回想	34
第2項	インフラ整備と軍用農場設置を目的とした土地の接収	34
第3項	恐喝、略奪、窃盗	35
第4項	ビルマ軍兵士による性暴力	36
	Box 3 発電所警備にあたるビルマ軍兵士が起こした強かん事件	36
第5項	徴兵制度と子どもの権利の侵害	37
第6項	迫害と超法規的処刑	37
第7項	発電所と送電塔警備のために埋設された地雷による死傷者	38
第6節	生態系破壊と生活基盤の消失	39
第1項	バルーチアウン水力発電所建設による森林破壊と洪水	39
第2項	モビエダムによる漁業への影響	40
第3項	軍事活動が食糧採集と農業に与える影響	40
第7節	暗闇に取り残される	40
	Box 4 バルーチアウン水力発電所の歌	41
第3章	サルウィン川ダム建設事業	43
第1節	サルウィン川ダム建設事業とは	45
第2節	ダム建設計画	45
第1項	ウェイジーダム	46
	地図9 ウェイジーダム建設による推定水没地域	47
第3節	ウェイジーダム建設が人々の生活にもたらす影響	48
第4節	人々の生活手段に与える影響	48
第1項	農業	48
第2項	漁業	49
第3項	森林での狩猟採集の生活	49
	表3 ウェイジーダム建設に伴う人的影響(推定)	50
	Box 5 漁場の破壊	51
第4項	河川交易	51
第5節	ウェイジーダムがもたらす社会的・文化的影響	52
第1項	社会福祉サービスへのアクセスと健康に与える影響	52
第2項	歴史的・文化的遺跡	53
	ソーロン	53
	歴史的なカレンニー・タイ友好協定調印の場	53
	Box 6 絶滅の危機に瀕する民族、インタレー	54
第6節	ウェイジーダム建設が環境に与える影響	55
	Box 7 ダムが生態に与える影響	55
第4章	結論と勧告	57
第1節	結論	59
第2節	勧告	59

略語一覧

- AFPFL (Anti-Fascist People's Freedom League) : 反ファシスト人民自由連盟
BSPP (Burma Socialist Program Party) : ビルマ社会主義計画党
EGAT (Electricity Generating Authority of Thailand) : タイ発電公社
IB (Infantry Battalion) : 歩兵大隊
IDP (Internally Displaced Person) : 国内避難民
ILO (International Labor Organization) : 国際労働機関
KDRG (Karenni Development Research Group) : カレンニー開発調査グループ
KEG (Karenni Evergreen) : カレンニー・エヴァーグリーン (カレンニー州の環境問題に取り組む団体)
KNLP (Kayan New Land Party) : カヤン新領土党
KNPLF (Karenni Nationalities People's Liberation Front) : カレンニー人民解放戦線
KNPP (Karenni National Progressive Party) : カレンニー民族進歩党
KnRC (Karenni Refugee Committee) : カレンニー難民委員会
KNWO (Karenni National Women's Organization) : カレンニー民族女性機構
KSWDC (Karenni Social Welfare and Development Center) : カレンニー社会福祉発展センター
LIB (Light Infantry Battalion) : 軽歩兵大隊
MW (Megawatt) : メガワット
NLD (National League for Democracy) : 国民民主連盟
SLORC (State Law and Order Restoration Council) : 国家法秩序回復評議会
SPDC (State Peace and Development Council) : 国家平和発展評議会
TBBC (Thailand Burma Border Consortium) : タイ・ビルマ国境支援協会
TPDC (Township Peace and Development Council) : 郡区平和発展評議会
VOK (Voice of Karenni) : ヴォイス・オブ・カレンニー (2000～2002年にカレンニーに関するニュースを発信した短波ラジオ番組)

序文

『緑の精霊の地から (From the Land of Green Ghosts)』の著者パスカルクートウェ

ビルマ東部のシャン州、カレンニー（カヤー）州、カレン州に住む人々にとって、サルウィン川は崇敬すべき母なる川だ。サルウィン川は太古の昔から人々に食糧や薬草といった恵みをもたらし、人々の生活基盤を支えてきた。

今やサルウィン川とその川が育む大地は、複数のダム建設によって破壊の危機に瀕している。ダム建設は先住民をじわじわと死に追いやるだけでなく、絶滅の危機に瀕している動植物に死刑を宣告することになる。政府やビジネスマンにはいくらでも代わりがいるが、絶滅した種は二度と戻ってこない。

私は 1960 年代後半に、モビエダムがあるシャン州のペコンで育った。ちょうどモビエダムの建設が進んでいた頃だった。子どものころは身近にいた野生動物や植物はもはやない。ブルドーザーと銃の威力とを同時に操ることほど、国を破壊するのに効率的な方法はないのだ。ダム湖の水を見れば、人間の苦しみと、死にゆく動植物の悲痛な叫びの物語を語ることができる。

環境に及ぼす取り返しのつかない影響や、タイ・ビルマへの長期的な社会的・政治的影響を考慮しないままサルウィン川にダムが建設されれば、流域に住む先住民だけでなくタイ・ビルマ両国にも大きな被害が出る。本報告書が警告するのはまさにこのことである。

サルウィン川はこれまでも利用されてきたし、これからも利用され続けるだろう。しかし川を守る先住民と彼らの住む環境を犠牲にしてまで利用するのは間違っている。

ダム建設に影響力を持つ人々、また事態を憂慮する人々は、この報告書を読み、手遅れになる前に理不尽な破壊行為を控えるべきだ。破壊をもたらすダムを建設し、神聖な母なる川、サルウィン川を殺さないでほしい。サルウィン川が秘める力を利用するために、ダム建設に代わる持続可能な方法を見つけなければならない。



地図1: ビルマ国内のサルウィン川上の
ダム建設予定地



要旨

ビルマ初の大型水力発電所は、カレンニー州を流れるバルーチャウン川にあるロピータ滝に建設された。建設が開始された1960年代初頭から、国営新聞や軍政首脳は、この発電事業がカレンニー州に灌漑、電力と発展をもたらすと豪語していた。しかし実際にカレンニーの人々が直面したのは、水不足や大洪水で作物が台無しになり、貯水池のせいで数千人が強制移住させられ、魚の生態系が破壊されるという現実だった。今日でも、カレンニー州に住む人の8割は電気のない生活を送っている。

地域の発展をもたらすという約束が果たされなかったこと以上に問題だったのは、バルーチャウン発電所が軍政にとって主要な電源となったため、国軍の兵士数千人が発電所警備のためカレンニー州に送り込まれたことである。この結果、さらなる強制移住、強制労働、農地への地雷埋設、女性に対する性暴力と超法規的殺害が起きるようになった。

このような人権侵害行為は今も続いている。それなのにタイ政府は、ビルマ軍事政権と協力してビルマ東部のサルウィン川に新たに複数のダムを建設することに合意した。ダムによりタイは電力を、ビルマ軍政は収入を得ることになる。計画中の4つのダムのうちウェイジーダムは、バルーチャウン発電所用の主要なダム（モビエダム）の10倍も高く、農耕に適したカレンニー州の平野部の水田の多くを水没させてしまう。3万人が影響を受け、取り返しのつかない環境被害が引き起こされるだろう。

バルーチャウン発電事業の経験

モビエダムはバルーチャウン水力発電所の電力生産を支えている。モビエダム建設により、207平方キロメートルの貯水池ができ、土地の水没によって住民8,000人が移住しなければならなかった。肥沃な土地もやせた土地も森林も水没してしまった。水使用に関しては発電が最優先とされたため、農業用水が足りなくなり、生存に必要な作物が台無しになった。雨季の増水時にはダムから放水があり、農作物に壊滅的な打撃を与えた。魚の生態系も劇的に変化した。ダム建設前にはたくさんいた数種の魚が、今ではとても珍しいか、すっかりいなくなってしまう。

送電線が通る村々でさえ、当初から現在に至るまで電気のない生活を送っている。カレンニー州でバルーチャウン発電所からの電気が来るのは3つの町だけで、それらの町でも主に軍関係者にしか届かない。そもそもほとんどの住民にとって電気代は高すぎて、夜になると電球のかすかな光が影を投げかけるのみである。

バルーチャウン発電所建設で推定1万2,500人が永久に住居と田畑を失ったが、ほとんどの人は補償を一切受けなかった。発電所付近の住民は暴力で脅されて立ち退かされ、田畑には発電所の警備という目的で地雷が埋設された。以来、発電所周辺と送電塔の下には、常に数多くの地雷が埋められている。住民が地雷を踏んで負傷すると、治療が受けられるどころか、爆発させた地雷の代金の支払いを命じられる。

ビルマ軍はバルーチャウン発電所周辺を支配下におくため、1960年以降カレンニー州の軍事化を進めた。同州では以前はパトロールが定期的に行われるだけだったが、24以上の大隊が常駐するようになった。軍備の拡大によって住民への抑圧はさらに強まっている。発電所の最寄りの村ロピータに駐軍するビルマ軍兵士による集団強かんをはじめとした性暴力や、パトロール中の兵士による恣意的殺害の事例が報告されている。元ビルマ軍兵士とロピータ地域から逃れてきた難民の話から、地元住民に対し強制労働やポーター（荷物運搬人）の徴用、強奪が組織的に行われていることが確認できる。

サルウィン川ダム

ビルマ軍事政権は2005年、サルウィン川に4つのダムを建設することでタイ政府と合意した。2007年に建設が開始される予定である¹。4つのうちウェイジーダムは、ビルマのカレン州とカレンニー州の州境の近くに建設予定である。パルーチャウン発電所のモビエダムと比較すると、ウェイジーダムの高さは少なくとも10倍で、貯水池によって水没する面積は推定で少なくとも3倍となる。カレンニー州の重要な農地や交易水路を含む640平方キロメートルが水没するのだ。

ビルマ軍による攻撃と強制移住政策の結果、水没予定地域の多くにはもう人が住んでいないが、それでも約3万人が影響を受けると見られている。人口1,000人に過ぎないインタレー民族は、水位の上昇にともない土地を追われ、永久に故郷を失うことになるだろう。

ダムによって生活手段が奪われれば、住民の生存そのものが直接脅かされる。サルウィン川沿いの肥沃な土地もやせた土地も、深い森林も鉱物資源採掘場も水没する。流れの速い川が湖に変わることから、魚が産卵する瀬や洞窟が破壊されるだろう。26の村と、2つの町が水没する。町は周辺の村落の住民に教育、医療を提供し、重要な交易の中心でもある。そのうちのひとつボーラケはカレンニー州の古都だ。かつての王宮と仏舎利塔（パゴダ）が水没する。

ダム建設によって環境にも深刻な影響が出るだろう。類まれな生物多様性の存在が認められている地域が水没し、野生動物の棲息地がなくなるだろう。水没を免れた森林が浸食され、新しく道ができることによって、これまで人が入れなかった地域で森林伐採が進む可能性が高い。無数の動植物が棲息する豊かな地域が、十分な調査が行われる前に破壊されてしまうことになるのだ。

ビルマ軍事政権とタイ政府は、サルウィン川ダム建設を、タイには電力を、ビルマには貴重な収入をもたらす素晴らしい計画だとしか捉えていない。だがこの単純な計算式には、国際社会から非難されているビルマ軍事政権の人権侵害と汚職問題が入っていない。また、カレンニーの人々が資源利用に関する意思決定のプロセスから再び排除されることも、遠隔地の住民への電力供給のために犠牲にされることも考慮されていない。カレンニー州の住民の3分の1はビルマ軍の強制移住作戦により国内避難民となっている。また同州はビルマでもっとも疾病率が高く、識字率が低い。これらの事実と考え合わせると、カレンニーの人々にこのような「開発」が必要ないことは明らかだ。

この報告書は、タイと中国をはじめとした海外の投資企業に対して、サルウィン川ダム建設への支援と関与を中止するよう要請するものである。ダムはさらなる人権侵害を招く。ダム建設に投資する者は必然的にこれらの侵害の共犯者となる。ダムは軍政に収益をもたらし、軍政の権力を強化することにつながる。地元社会には何の利益ももたらさない。パルーチャウン発電所建設の経験が、その証拠なのである。

1 (訳注) 2008年10月現在、2か所(シャン州のタサンダムとカレン州のハッジーダム)で建設準備が始まっている。詳しくは特定非営利活動法人メコン・ウォッチのウェブページ「サルウィン川ダム開発」<http://www.mekongwatch.org/env/burma/salween>を参照。

定で
ジェ
カレ

ける
るだ

深い
、2
二一

息地
が進

しか
また、
され
州は
ない

する
をも
の証

第1章 序論と背景



©ディーン・チャップマン

は特
照。

序論と背景

第1節 はじめに

「故郷や同胞から長い間離れて暮らすと、ヤウラ（守護精霊）が永遠にいなくなってしまう、それとともに私たちの幸せと幸運も失われてしまうのではないかと大変心配です」²。

ビルマで最初の大型水力発電所は、約 50 年前、カレンニー州のバルーチャウン川にあるロピータ滝に、住民に何の相談もないまま建設された。ほとんどの人はダムや水力発電所を建てるというのがどういうことなのか、まったく知らなかった。住民の中には、土地が水没することを信じられず、貯水池に貯まっていく水が玄関先まで迫ってきてからやっと逃げた人もいた。

以来、ロピータ周辺からは多くの難民が安全と生存のために逃げ出してきた。難民には、奪われたものへの補償は一切なかった。したがって、カレンニー開発調査グループ（KDRG）は彼らの物語を伝える使命感を持ったのである。サルウィン川にダム建設が予定されている今こそ、バルーチャウン発電所建設に関するカレンニーの人々の経験が、サルウィン川流域に住むタイ・ビルマ両国の兄弟姉妹への警告となることを私たちは切望している。さらに重要なこととして私たちが切望するのは、この警告がビルマ軍事政権と手を組んでビジネスをしようとする人々に届き、サルウィン川流域の住民にとって「開発」とは何かを理解してもらうことである。

第2節 方法論

カレンニー開発調査グループは過去 5 年間に渡って、バルーチャウン水力発電事業がもたらした影響について綿密な聞き取り調査を行った。対象者の中には、発電所警護のため駐留していた元ビルマ軍兵士、地元のリーダー、水力発電所に勤務していた者など、発電所に深く関与していた人々もいる。地主、農家、漁師、地雷被害者の親族、多くが何度も強制移住させられたロピータ地域からのカレンニー難民など、事業の影響を直接被った人々からも話を聞いた。同グループは正確な状況と人口数を査定するために、カレンニー州内のロピータ地域およびサルウィン川、ポーン川流域で調査を行った。本報告書第 3 章の「サルウィン川ダム建設事業」は、生活手段と環境への影響が予想される地域の情報と、タイとカレンニー州を頻繁に行き来する行商人や水没地域出身の難民からの聞き取り調査とに基づいている。

カレンニー開発調査グループはまた、政府・企業・民間の史料、設計検討書、新聞記事、調査報告書を収集、分析した。ウェイジータムによる洪水地域の推定は、NASA / NGAA シャトル・レーダー・トポグラフィー・ミッション（2000 年 2 月³）による 90 メートルデジタル評定モデルの地形データに基づいている。ウェイジータムの最高水位以下の高度にある土地が水没予定地域になる。

² From the Land of Green Ghosts, Pascal Khoo Thwe, 2002, pp.62-3.

³ Digital Elevation Model Data, U.S. Geological Survey, Published by University of Maryland, version 1.0. Source for this dataset was the Global Land Cover Facility, <http://landcover.org>.

第3節 背景⁴

第1項 ビルマ

ビルマ独立以降の軍事政権

ビルマ独立の父、アウンサンが1947年に暗殺されて間もなく、ビルマでは内戦が始まった。1962年のクーデターで権力を手にした軍はビルマ社会主義計画党(BSPP)を結党し、1988年まで政権の座についていた。1988年の学生によるデモは全国で暴力的に鎮圧され、新しい軍事政権、国家法秩序回復評議会(SLORC)が政権を握り、国の英語の対外呼称をMyanmar(ミャンマー)に変更した。1990年に民主的な政権委譲のための総選挙が行われた。アウンサンスーチー率いる国民民主連盟(NLD)が圧倒的な勝利を収めたが、軍事政権側は選挙結果を受け入れなかった。1997年、国家法秩序回復評議会は国家平和発展評議会(SPDC)に改名し、現在に至る。国連総会はビルマ軍政に対し、1990年の選挙結果を尊重すること、人権状況を改善することを繰り返し要請しているが、軍政は従っていない。

カレンニーの人々は、独裁体制からの自由を求め闘い続けている。ビルマ軍政による軍事攻撃を受けて、人々は避難生活へ追いやりられ、庇護を求めてタイに越境する人が後を立たない。ヒューマン・ライツ・ウォッチは、「2004年末の段階で、ビルマ東部だけで65万人が国内避難民となっている。(中略)タイには200万人のビルマ人がおり、そのうち14万5,000人が難民キャンプに暮らしている⁵」と指摘している。現在、2万2,000人以上のカレンニー難民が2つの難民キャンプで生活している⁶。

ビルマの水力発電開発

軍事的支配に必要な財政基盤を維持するため、ビルマ軍事政権は国外の企業に天然資源の持続不可能な利用と搾取を許すようになった。電力を必要としている近隣国が、国際的に孤立するビルマにダムを建てようとする中、軍政は、手つかずで眠っている水力資源を他国に開発させることが魅力のある外貨獲得手段であることに気が始めている。

ビルマ政府の公式統計によると、2005年3月末の段階でビルマの国内電力網の定格出力合計は1,300メガワット以上だった⁷。水力による発電はこのうち30～35%を占めている。

バラーチャウン第2水力発電所の定格出力は、最近まで一つの発電所としては国内最大だった⁸。2002年に行われた修復の基礎設計書によれば、第2発電所はビルマ全体の電力のうち推定28%を供給している⁹。しかし1990年以降、ビルマ軍事政権はより大きな発電能力をもつ巨大ダムの建設を急いでいる。

雑誌*The International Journal of Hydropower and Dams*は、ビルマの中長期的な建設計画について水力発電省のウィンチョウ長官にインタビューし、2005年の第2号でビルマの水力発電の現状を次のように伝えた。

「現在、8つの大型ダムの建設が始まっており、さらに16の建設計画がある。こうしてミャンマーは大規模な水力発電開発を推進

4 記述の一部は、*Conflict and Displacement in Karenni: The Need for Considered Responses*, Burma Ethnic Research Group (BERG), 2000.に基づく。

5 *UN Security Council Should Take Up Burma's Human Rights Crisis*, Human Rights Watch release, October 14, 2005. (訳注) 2008年10月現在、タイ国内のビルマ人難民数は13万5,088人。国内避難民はビルマ東部だけで約50万人とされる。最新の難民数は、タイ・ビルマ国境支援協会(TBBC)のウェブサイト<http://www.tbbsc.org>を参照。

6 タイ・ビルマ国境支援協会(Thailand Burma Border Consortium)による人口統計(2005年12月)。

7 *Myanmar, Thailand to implement hydropower project*, People's Daily Online, December 12, 2005. 1メガワット(MW)は100万ワットに相当する。参考までに、100ワットの電球1万個、もしくは2,000台のコンピューター・システムを起動させるのに、1メガワットが必要である。

8 ビルマは水力発電の能力向上を急いでおり、バラーチャウン発電所(定格出力196メガワット)の発電能力を上回る発電所が出てきている。パウンラン発電所の最終的な定格出力は280メガワットとなる予定。2005年初旬に最後の発電機が納入されることになっていた。シャン州北部のシュエリダムは定格出力400メガワットで完成間近とされる。イエウワダムの定格出力は745メガワットで現在建設中。出典: *International Journal of Hydropower and Dams*, Issue Two, 2005. (訳注) また、*Hydropowering the Regime, The Irrawaddy*, Yuki Akimoto, June 2004, at http://www.irrawaddy.org/article.php?art_id=3757も参照。

9 *Basic Design Study on the Project for Rehabilitation of Baluchaung No. 2 Hydro Power Plant*, Japan International Cooperation Agency, Nippon Koei, Co. Ltd., Tokyo Power Electric Co., Ltd., January 2002.

している。電力省は、国内需要と近隣諸国への電力輸出を実現するため水力発電を最優先にしている。水力資源は現在のところ約2%しか開発されていないので、電力省水力発電局の今後の役割は大きい¹⁰。

第2項 カレンニー州の概観

カレンニー州はビルマ東端に位置し、東部はタイのメーホンソーン県、北部はビルマのシャン州、南部はカレン州と接している（地図1「ビルマ国内のサルウィン川上のダム建設予定地」を参照）。面積は1万1,867平方キロメートルとビルマでもっとも小さく、人口も一番少ない。カレンニー州には7つの郡があり人口は約30万人¹¹で、人口密度はとても低い。7つの郡は、ディモソー、プルソー、ロイコー、パサウン、ボーラケ、シャドウ、メーセツである¹²。州都のロイコー（人口約5,000人）は州でもっとも大きな町である。

カレンニー州で多数を占める民族はカヤーで、その他にゲーコー、ゲバ、カレン、カヤン（パダウン）、カヨー、ブレ、マヌマノウ、シャン、インボー、インタレーなど諸民族が居住している。中には共通の祖先をもつものもある¹³。各民族は、独自の言語と慣習、信仰をもつ。同じ民族内でも方言などの違いがある場合もある。現在ではかなり少数となった民族もあり、例えばインタレー民族は1,000人しかいないと推定されている。

カレンニー州に多様な民族が住んでいるのは、山がちな地形、地表の多様性、微気候と天然資源などが理由だろう。川沿いの低地帯を除き、カレンニー州の大部分は、シャン高原南部に位置している。主要な水路はサルウィン川で、州の東部を南北に流れる。平行して主な支流のポーン川が流れている。ポーン川の主な支流はバルーチャウン川で、ここにモビェダムが建設された。ポーン川では船の航行ができないが、サルウィン川では一年を通して船の運航が可能であり、州の主要な運送ルートとなっている。その他の支流も、間接的、直接的にサルウィン川に注ぎ込み、カレンニー州の全土を結ぶ水路を形成している。

州の住民の大部分は、高地と低地での稲作と狩猟、漁業、林産物で生計を立てている。その他にも、小規模の森林伐採と、主にサルウィン川を使ったタイとの交易が行われている。カレンニー開発調査グループは、州の全人口の3分の1に当たる約10万人が、サル

ウィン川、ポーン川、パイ川での漁業、交易、農業などで生計を立てていると推計している。サルウィン川ダム建設による水没やそれによってできる貯水池で、川に依存した生活が深刻な影響を受ける。

森林資源、とりわけチーク材は、歴史的にカレンニー州の経済資源の重要な部分を占めていた。スズとタングステンは特にモーチー鉱山周辺に多く埋蔵されている。州内には、他にも大理石、アンチモン、金、サファニアなどの鉱物が確認されている。

地理的にアクセスが困難で、運送基盤が十分に整っていないこと、そして長期間に渡る内戦のため（次項「カレンニー州の歴史概略」を参照）、カレンニー州は人材育成に遅れをとってきた。カレンニー州の識字



ポーン川 提供：カレンニー開発調査グループ

10 Hydropower plays a leading role in Myanmar's power development plans, International Journal of Hydropower and Dams, Issue Two, 2005.

11 第10回カレンニー民族進歩党会議（2005年）に提出された2004年のセンサスに基づく。ビルマでは1983年以来、公式にセンサスが行われていない。しかし、一般的にカレンニー州の人口は25万人以上とされている（例えば、www.dpsmap.comを参照）。30万人という数字は、国内避難民数を含めたもっとも正確な人口数である。

12 （訳注）郡都の町の名がそのまま郡の名となる。例えばロイコー郡の郡都はロイコー。

13 今日では、カレンニー州に居住している者の総称として「カレンニー」を用いる。「カレンニー」は、「赤カレン」という意味で、カヤー民族のことを指していた。（訳注）注13にあるように「カレンニー」も「カヤー」も同一の民族を指す。「カレンニー」とはビルマ語のカインニー（Kayinni）が英語化した他称で、「カヤー」とは、カヤー語で「人間」を意味する自称である。カレンニー民族進歩党は、州内に居住する諸民族が一致団結してビルマ政府に抵抗する意図を込めて、自称であり他民族を含まないカヤーではなく他称であるカレンニーを、州内に住む諸民族の総称として用いている。なお州名は、1951年の憲法改正で「カレンニー」から「カヤー」に変更された。

率は、ビルマの他州に比べて著しく低い¹⁴。教育省によると、1998年段階でカレンニー州には高校は10校しかなかった。メーセツ郡とシャドウ郡には高校はなく、それぞれ中学校が1校ずつあるだけである。カレンニー州の7つの郡のうち、シャドウ、ボーラケ、パサウン各郡の辺境地域に住む子どもたちは、教育機会にもっとも恵まれていない。国内避難民(IDP)は、必然的にもっとも劣悪な教育環境に置かれており、国内避難民の子どもたちは常に恐怖にさらされ、移動を余儀なくされている。

住民の健康状態は全体的に良くない。一部の地域では栄養失調と食糧不足が深刻である。公的な健康・保健サービスは限られており、「都市部」として機能している小さな町にしかない。さまざまな伝染病により罹病率が高くなっており、強制移住作戦により伝染病がさらに拡大している。カレンニー州はビルマのなかで、マラリアの感染率・死亡率が共にもっとも高い。予防接種率は全国平均より著しく低く、安全な飲み水を用いることのできる人の割合も同様に低い¹⁵。

カレンニー州の歴史概略¹⁶

現在のカレンニー州の7郡は、サオビヤーと呼ばれるカレンニーの領主が独自に統治していた各領域におおむね該当する。それぞれの領主は、外部からの勢力に対して互いに協力した。サオビヤー支配のもとカレンニー州はいかなる外部勢力にも屈しなかった。英国植民地期でさえ、カレンニー州は独立が認められており、1875年には英国とビルマ王朝の間でカレンニー州の独立を認める合意が交わされた。1948年にビルマが英国から独立するまで、カレンニー州は独立していた¹⁷。

ビルマが英国から独立するにあたり、ビルマ人は反ファシスト人民自由連盟(AFPFL)政権を樹立したが、カレンニー勢力はそれに対抗する形でビートウレ率いるカレンニー抵抗政府(KRG)を樹立した。1948年8月9日、ビルマ軍がカレンニー州に侵攻、9月8日にはビートウレを拘束し、袋に詰め込み銃剣で突き刺し、ロイコーでバルーチャウン川に投げ捨てて殺害した。それ以降、カレンニー抵抗勢力と歴代のビルマ軍事政権との争いが続いている。

カレンニー抵抗政府は1957年にカレンニー民族進歩党(KNPP)として再編された。カレンニー民族進歩党から分離した複数のカレンニー抵抗勢力が長年にわたってビルマ政府に対峙してきた。その中でももっとも活動が顕著なのは、1978年にカレンニー民族進歩党から分離したカレンニー民族解放戦線(KNPLF)である。しかし2002年現在、カレンニー州ではカレンニー民族進歩党を除くすべての武装組織がビルマ軍政と停戦に合意している。

カレンニー州の軍事化

1948年から1961年までは、ビルマ軍はカレンニー州に常駐しておらず、パトロールを行うのみだった。しかし1961年にロピータでバルーチャウン発電所建設の第1段階が完了すると、軽歩兵大隊がロイコーに駐屯するようになり、ついで州内の他地域にも軽歩兵大隊が駐屯するようになった。1988年の学生蜂起の後、ビルマ軍の活動はさらに活発になった。現在カレンニー州では、24の陸軍大隊(内訳:14個大隊、9個機動大隊、ボーラケの作戦司令本部の警護にあたる1個大隊)が駐屯している(地図2「カレンニー州のビルマ軍基地(1990年以前)」、地図3「カレンニー州のビルマ軍基地(1990年以降)」を参照)¹⁸。



森の中で生存を図る国内避難民の家族、パサウンにて 提供：カレンニー社会福祉発展センター

14 BERG 2000, p.93.

15 BERG 2000, p.7.

16 以下の歴史記述の一部は、*Independence and Self-Determination of Karenni States*, The Karenni Resistant National Revolutionary Council, 1974(1997)に基づく。

17 (訳注)ただし1875年の条約で独立が認められたのはカレンニー州西部(サルウィン川の西側)であり東部は含まれていない。*Relation of Karenni State to Burma*, India Office Library and Records, M/4/3025, 24 June 1946.

18 カレンニー民族進歩党の軍事情報に基づく。

第3項 恐怖にさらされる人々

1948年に戦闘が始まって以来、ビルマ中央政府の指導部はカレンニー州を征服しようとしていた。1960年代後半から、ビルマ軍は「4つの分断作戦」¹⁹を非ビルマ族が居住する地域で実行し、一般市民を軍事攻撃の標的にした。武装抵抗組織への物資の供給と支援を断ち切るためである。ビルマ政府は「4つの分断作戦」の一環として、1974～75年にカレンニー州で最初の大規模な焦土作戦を行った。目的はパイ川とサルウィン川流域の支配にあった。一連の軍事攻撃でパイ川とサルウィン川流域の24村が破壊され、約3,720人が家を追われた²⁰。この地域を巡る攻防は1980年代まで続いた。ビルマ軍、カレンニー武装組織の双方にとってサルウィン川流域は戦略的に重要な地域であったからだ。

カレンニー州の一般市民が家を追われることはそれほど珍しくない。住民は強制的に追い立てられ、戻って来られないように村ごと焼き払われることも多い。住民は軍が支配する指定地域に移住するか、少人数に分かれて隠れ、森や水場で食べ物を探す生活をしなければならない。状況がよくなれば、元の村に戻ったり、新しい地域に定住しようとすることもある。このように、人々は森と村を行き来し、肉体的、精神的に追い込まれた生活を強いられている。

強制移住の過程では、住民に援助が与えられることはほとんどない。移住命令に従い当局が指定する場所に移動しようとする者でさえ、途中で死んでしまう場合がある。例えば1992年には、プルソーの西にある57の村に住む1万2,000人以上と、ディモーソー郡の住民8,000人以上が、それまで居住していた高地や辺境地域から、それぞれプルソーとディモーソーの町に移住させられた²¹。移住にあたって移動手段・食糧・医療品は一切提供されなかった。3か月の間に40人以上が食糧不足と伝染病で死亡した²²。



シャドウ郡の国内避難民の子ども 提供：カレンニー社会福祉発展センター

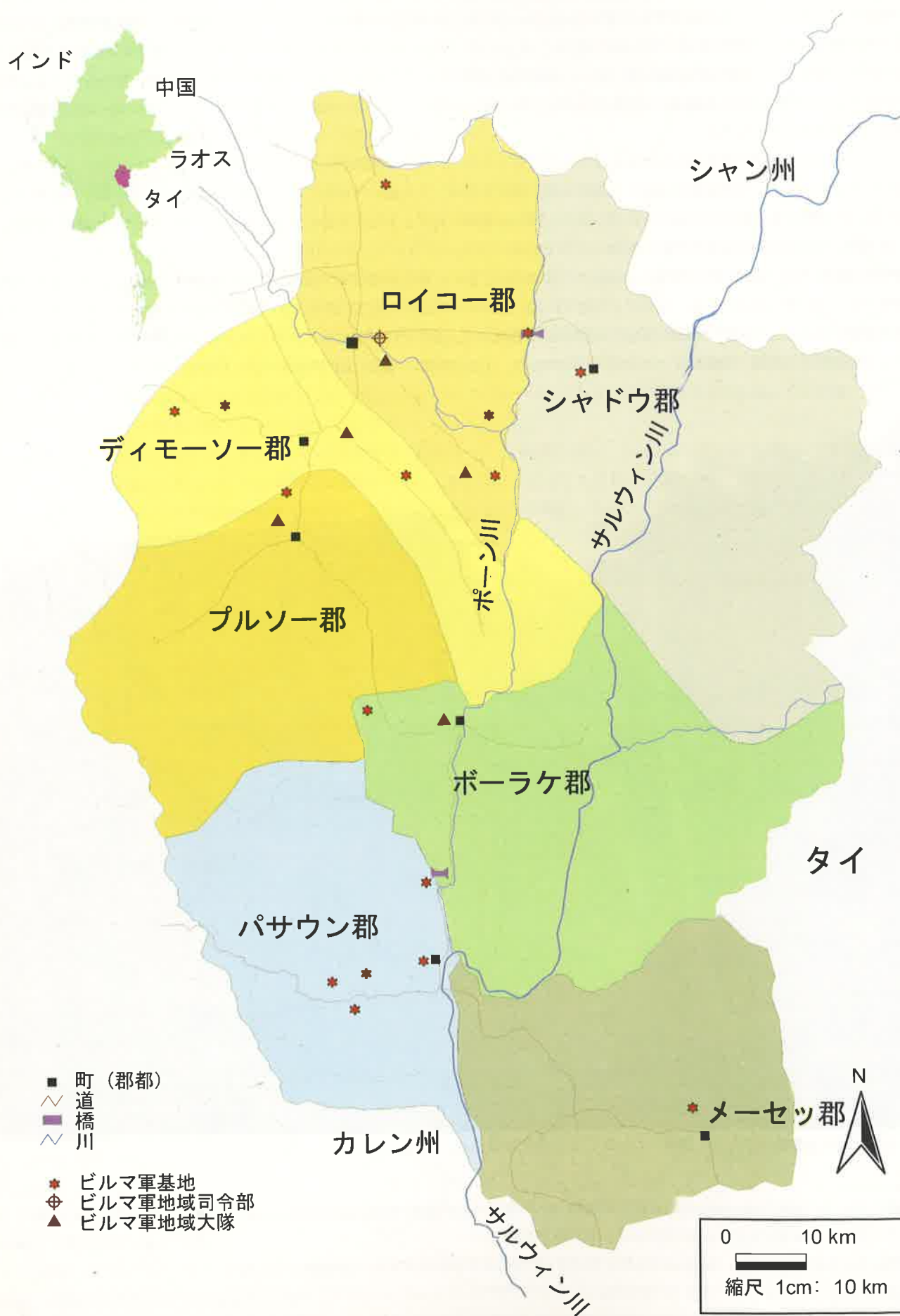
19 (訳注)「4つの分断作戦」とは、反政府民族武装勢力への食糧・資金・情報・参加の流れを断つことを目的とした作戦。この作戦の下、武装勢力が支配する地域に住む一般市民がしばしば攻撃される。

20 KDRG が2005年、Ethnic Migrant Families Society から聞き取り調査を行い、情報を入手した。

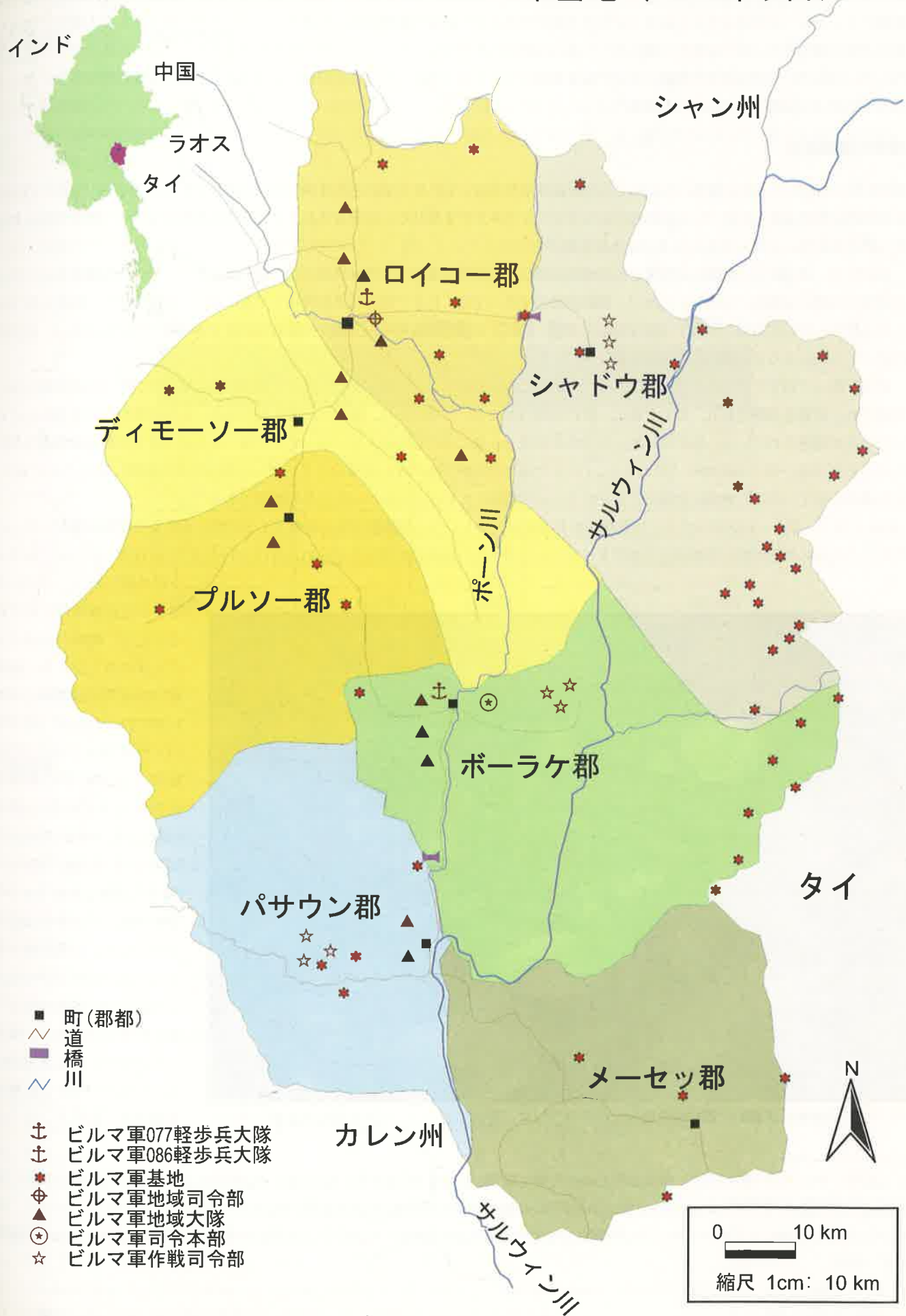
21 (訳注) 郡名、町名については注12を参照。

22 *Aftermath: Three years of dislocation in the Kayah State*, Amnesty International, June 1999.

地図2: カレンニー州のビルマ軍基地（1990年以前）



地図3: カレンニー州のビルマ軍基地 (1990年以降)



1995年にビルマ軍政とカレンニー民族進歩党(KNPP)の停戦合意が破棄されると、ビルマ軍政はカレンニー州での支配をさらに強化するため全面攻撃に乗り出した。過去10年の間にビルマ軍政は、直接攻撃、大規模な強制移住、停戦合意に応じた武装組織や民兵組織にカレンニー民族進歩党と対峙するよう圧力をかけるなど、複数の戦術を使ってきた。こうした中、兵士による人権侵害を通して軍の支配が強化され、国内避難民や隣国タイへ逃れる難民の数が増加した。このような状況の下でサルウィン川に巨大ダムが建設されることになれば、軍政は建設地警備の名目で軍を増強することができる。そして最終的には、ダムが生産する電力がもたらす収入で軍政の支配がさらに強まることになるのだ²³。

大規模な強制移住

1996年、カレンニー州全域で、カレンニー民族進歩党を支持していると思なされた村の住民が追放された。1996年だけで212の村が強制的に移動させられた²⁴。この作戦によってジャングルで生き延びることを迫られたり、過密した強制移住地に無理やり入れられたりした住民は、少なくとも3万7,000人に上る²⁵。

住民には、命令に従い期間内に指定された地域に移住する以外に選択の余地はなかった。移動にあたって一切の支援はなく、失った農地や所有物の補償など望むべくもない。移動期限前であっても、ビルマ軍は住民を脅迫し手荒に扱い、家畜を殺し、穀倉を焼き討ち、手当たりしだいに破壊し強奪する。子ども・老人・病人・妊婦も関係なく、全員が強制移住地まで歩かなければならない。住民が再び戻ってこないようにと焼かれた村もある。

命令に従って指定された移住先は過密状態で、医療はほとんどなく、食糧も不十分で、土地は耕作に適さない。住民は移動を厳しく規制され、労働を強制される。特に女性は、移住地域内外で弱い立場にある。難民への聞き取りから、女性が襲われたり強かんされていることが確認されている。強制移住地での生活を拒否し、森に逃げこんだ人もいる。そこでは、本来治るはずの病気や栄養失調に苦しむことになる。多くの地域が「黒エリア」(ビルマ国軍の支配が及ばない地域のこと)という無差別発砲地域に指定されており、安全が確保されていないため常に危険にさらされている状態だ。これがカレンニーの人々の現実である²⁶。

1996年まで、ポーン川とサルウィン川に挟まれた高地は、カレンニー民族進歩党が攻撃をしかけるにあたり有利な位置だった。このためこの高地の住民が特に強制移住作戦のターゲットとなった。1996年に移住させられた212の村のうち、96はポーン川とサルウィン



ジャングルで食事の準備をする国内避難民、パサウンにて 提供：カレンニー社会福祉発展センター

川の間であり、これらの村々の住民が移住させられたことで、地域にはほとんど人がいなくなった(地図4「1996年の強制移住作戦以前に存在した村(ポーン川・サルウィン川以東)」、地図5「1996年の強制移住作戦以後に存在した村(ポーン川・サルウィン川以東)」を参照)。1974～75年に実施された「4つの分断作戦」でも多数の住民が流出したことを加味すると、一連の作戦でサルウィン川沿いの大多数の村が一掃されたことになる。サルウィン川ダムによる水没によって住民が受ける影響を考慮するにあたり、このこ

23 (訳注) カレンニー州の状況に関する最近の報告書も参照。Living Ghosts: The spiraling repression of the Karenni population by the Burmese military junta, Burma Issues, March 2008, at <http://www.burmaissues.org/En/reports/livingghosts.html>.

24 *Forced Relocation in Karenni: An Independent Report by the Karen Human Rights Group, Report # KHRG 96-24*, Karen Human Rights Group, 1996.

25 BERG 2000, p.50.

26 BERG 2000, p.92.

とを忘れてはならない。現在その地域に住む人が少ないとしても、その土地からすでに追い立てられた多数の人々は、故郷がいったん水没してしまえば二度と戻ることはできないのである。

国内避難民 (IDP) と難民の現状

タイ・ビルマ国境支援協会 (TBBC) によると、2005 年の時点でカレンニー州には推定 9 万 2,500 人、州人口のおよそ 3 分の 1 に上る国内避難民がいた。国内避難民は、少人数に別れてジャングルで生活し、状況に応じて頻繁に場所を転々と移動しなければならない。また小規模な軍事衝突があったり、ビルマ軍のパトロール兵が通過したりするので、立ち退きさせられたり暴力を受ける危険に常にさらされている。

情勢がもっとも不安定なパサウン郡では、絶えず約 5,000 人が森に隠れて生活している。2004 年初頭、パトロールするビルマ国軍部隊を避けてカレン州に逃げ込んだ 1,500 人のうち、約 1,000 人がもともと住んでいた村々の周辺の森に戻り、隠れて生活していた。しかし情勢が不安定なため、ごく小さな畑しか作れず、一度に 3～4 か月分の収穫量しかない。このため人々は食糧不足に陥った。ビルマ軍は水場周辺やジャングル内の小道に地雷を埋設し、住民が食糧を探しに森に入ることを妨害している²⁷。

表 1：カレンニー州の国内避難民 (IDP) 数 (2005 年)^{28, 29}

郡	居場所	森	停戦地域	指定移住地	合計
シャドウ		2,500	0	2,700	5,200
ロイコー		500	21,000	2,000	23,500
ディモーソー		500	38,000	1,400	39,900
ブルソー		500	7,500	0	8,000
ボーラケ		500	0	700	1,200
パサウン		5,000	1,500	700	7,200
メーセツ		0	7,000	0	7,000
合計		9,500	75,000	7,500	92,000

注：国内避難民数は 2004 年には 8 万 8,400 人だった³⁰。

多くの民間人が安全を求めてタイへ避難した。戦闘を逃れてきたとされタイで難民として登録されたカレンニー難民は、2005 年の段階で 2 万 2,333 人に達している³¹。このほか、タイに入った公式の難民キャンプ以外で生活している難民もいるが、人数は不明である。

人権侵害

過去 10 年間、カレンニー州内のサルウィン川流域でビルマ軍兵士による荷物運搬 (ポーター) の強要、強制労働、食糧・資材・金銭の強奪、拷問、超法規的殺害、村落 (住居や僧院、穀倉など) の焼き討ちが報告されている³²。例えば 1997 年には、ビルマ軍がワロンロイ村を僧院を含めて焼きはらった。同年、ビルマ軍の第 250 軽歩兵大隊がパレレー村で米を強奪し水田を破壊した。1998 年には、カイェケー村の住民 3 人がジャングルに隠れていたところ、ビルマ軍第 427 軽歩兵大隊に見つかり、その場で殺害された。2000 年にはビルマ軍が 2 か月に渡って軍事作戦を行い、パサウンの西にある 96 の村が焼き討ちにあった。住民は皆ジャングルへ逃れ、生き残ろうと必死だった。

2002 年 1 月には、ボーラケに駐屯するビルマ軍部隊と、農業省のウィンミン、チョーミン両氏が率いる一行がソーロン、ホーカム、レーウェイ各村を訪れた。一行は住民に、約 4,000 平方メートル (1 エーカー) あたり 4 缶分の種もみを出すよう命令した³³。村人の抗議は聞き入れられず、期間内に種もみを集められなければ村落区の責任者を投獄すると脅迫した。住民にとってこの命令に従うのは

27 Displacement and Protection in Eastern Burma, Thailand Burma Border Consortium, 2005.

28 Ibid.

29 (訳注) 原文 (英語版) には合計の一部に計算の誤りがあったため修正した。

30 Internal Displacement and Vulnerability in Eastern Burma, Thailand Burma Border Consortium, 2004. (訳注) 国内避難民に関する最新情報はタイ・ビルマ国境支援協会 (TBBC) のウェブサイト <http://www.tbtc.org> を参照。

31 タイ・ビルマ国境支援協会 (TBBC) による人口統計 (2005 年 12 月)。

32 Human Rights Violation in Karenni, Karenni News and Information Committee, annual reports 1996-2005.

33 (訳注) 缶 (Tin) は体積を表すビルマの単位で、1 缶は約 250 ミリリットル。

地図4: 1996年の強制移住作戦以前に存在した村
(ポーン川・サルウィン川以東)



地図5: 1996年の強制移住作戦以後に存在した村
(ポーン川・サルウィン川以東)



大きな負担だった。この3村の住民は以前ボーラケに移住させられた後、元いた村に2001年に戻ったばかりだった³⁴。

「停戦」を通じた分割統治

ビルマ軍政は、武装組織との停戦合意を通して国内の安定と一体性を維持し、国境地域に近代化と発展をもたらしていると自賛している。しかしカレンニー州のほとんどの地域が、公式には停戦地域とされていても事実上は紛争地帯のままで、住民は居住地を追われている。カレンニー人民解放戦線(KNPLF)は1994年にビルマ軍政と停戦に合意し、2005年にビルマ軍と協力してカレンニー民族進歩党(KNPP)の拠点に攻撃をしかけた。ビルマ軍が利権を約束したためだ。カレンニー民族民主党(KNDP)も1994年頃に、地元地域を支配する権利と引き替えにビルマ軍側についた。カレンニー民族民主党とビルマ軍の合同部隊は、1997年に国境のタイ側にある難民キャンプを襲撃した。このように軍政と停戦に合意した組織は、非停戦組織に対抗するようにし向けられ、同じ民族同士の紛争が引き起こされている。さらにビルマ軍政は、カレンニー民族進歩党から分裂した組織や民兵組織に特定地域や資源の支配権を与え、辺境地域の無法地帯化を助長している³⁵。

最近のビルマ軍の軍事活動

2005年12月23日、ビルマ軍4個大隊がサルウィン川の西約100キロのゲーゴバー村で行われていたクリスマス祭を突然襲撃し、同村を完全に焼き払った。これで新たに1,206人の国内避難民が出た。2002年12月にビルマ軍10個大隊の攻撃が2,000人以上のカレンニー住民、3,000人のカレン民族住民を標的として以来、攻撃は今も続いている。最近では、攻撃を受けていったん避難し、後日元の村に戻ってきた国内避難民が狙われている。この地域で軍事活動を展開するビルマ軍の目的は、カレンニー・カレン州境地域から住民を一掃し、ビルマ軍の支配地域に移住させることである³⁶。

これまでのビルマ軍の軍事活動から明らかなのは、サルウィン川のダム建設は、周辺地域とそこに住む人々、そして豊かな天然資源を支配するという、軍政のより大きな戦略に資するということだ。

第4項 極めて豊かな生物多様性

カレンニー州は、シャン高原の山間部の溪谷にある多くの水源に恵まれている。ロイコー、ディモーソー、プルソーには、熱帯雨林や熱帯季節林がある。もっとも高いエレファント・マウンテン(トーティコー、ナッタウンとも)は、海拔約2,500メートル(8,000フィート)である。カレンニー州東部は高地(海拔約1,800メートル、6,000フィートを超える所もある)で、中部が平野部、西部は山岳地帯だ。

世界自然保護基金(WWF)は「グローバル200」というプロジェクトを実施し、生物多様性が特に豊かな生態地域を約200か所全世界から選出した³⁷。そのうちの1つ「カヤー、カレン、テナセリムの湿潤林」は、ウェイジー、ハッジー、ダグウィンの各ダムによる水没予定地域である(地図6「大メコン河地域内の豊かな生物多様地域」を参照)³⁸。ビルマのほとんどの生態地域は、長引く紛争のため十分な調査が行われていない。ある報告書は次のように述べている。

「この地域は、大メコン河地域の中でもっとも野生動物が多い地域のうちの一つだ。鳥類の種の多さでは大メコン河地域で2位、哺乳類の種の多さでは4位だ。調査が進めば、さらに豊かな生物多様性が判明すると思われる。(中略) 一帯のこの地域には、起伏が多く、古生代の石灰岩層と張り出した崖、すり鉢状の凹地形、洞窟が多い。棲息する動植物は独自の特徴をもち、ここにしかない種もある。(中略) 比較的手つかずの棲息地があるので、虎などの絶滅に瀕した種の保護地域にすることも考えられる」³⁹。

サルウィン川のタイ側には、サルウィン国立公園とサルウィン野生動物保護区がある。ウェイジーダムが建てば保護区の一部が水没する。地元住民によると、ダム建設地に向かう道路が保護区内を通過して建設されている。

34 注32を参照。

35 *Displacement and Protection in Eastern Burma*, Thailand Burma Border Consortium, 2005. この報告書はさらに、「さまざまな組織が、政治的、経済的資源をコントロールするため、人と物資の移動を制限している」と指摘している(p.34)。

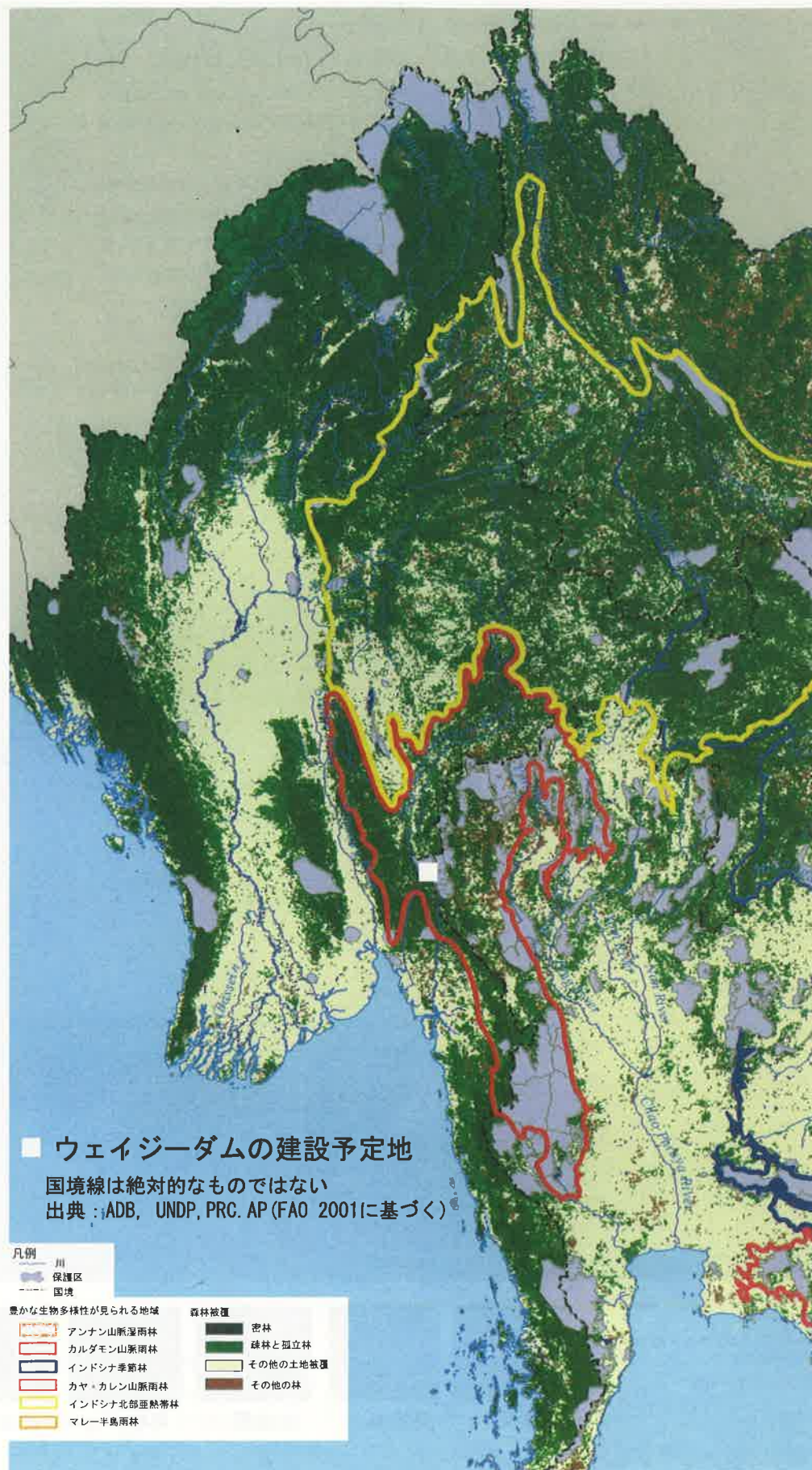
36 *Free Burma Rangers Update: Burma Army Attacks Karenni*, Free Burma Rangers, January 2, 2006.

37 *Greater Mekong Subregion Atlas of the Environment*, Asian Development Bank and United Nations Environment Programme, 2004.

38 (訳注) 財団法人世界自然保護基金ジャパンのウェブページ「グローバル200 陸域リスト」<http://www.wwf.or.jp/activity/g200/terrestrial/g200trst.htm> (2008年10月2日閲覧)。

39 ADB&UNDP 2004.

地図6:大メコン河地域内の豊かな生物多様地域



* 出典 Greater Mekong Subregion Atlas of the Environment, Asian Development Bank and United Nations Environment Programme, 2004.

地図7: インレー湖とモビエ貯水池（詳しくは第2章を参照）



3000 0 3000 6000 メートル

未処理データ源: ランドサット7ETM+
取得日: 2004年1月24日

衛星経路: Path/Row: 132/46

Red Band 5

Green Band 4

Blue Band 3



草原地



低木地



湿地帯



森林



貯水池

衛星写真による地図作成と映像解析: チョーサンウー、国連環境計画アジア太平洋地域資料センターにて

* 出典 Greater Mekong Subregion Atlas of the Environment, Asian Development Bank and United Nations Environment Programme, 2004.

森林

サルウィン川流域には広大な熱帯雨林があり、土壌が豊かだ。カレンニー州内の森林のほとんどは、フタバガキ科のインやチークなどの広葉樹材である。これらの木材の稀少性は増しており、世界市場で需要が増えている。英領期には「もしカレンニー州南部から伐採を開始し、サルウィン川に沿って北上すれば、また南部に戻ってくる頃には2巡目を伐採できるほど、森林が回復しているだろう」と言われることもあったほど豊かであった⁴⁰。このような森林はカレンニー州の主要資源である。小規模の伐採はこれまでずっと住民の収入源であった。しかし英領期に入ってから、森林伐採はかなり商業志向になっていった。

国家法秩序回復評議会(SLORC)軍事独裁政権が実権を握った1988年、軍政を最初に訪問した一人が、タイ国軍最高司令官のチャワリット將軍だった。彼は軍政と交渉して、タイ企業がタイ・ビルマ国境地域の貴重な森林の伐採権を獲得するように取り計らった。この結果1989～95年にかけてタイ木材企業6社がタイ・カレンニー国境とサルウィン川の間で広葉樹を大量に伐採した⁴¹。1995年にカレンニー民族進歩党とビルマ軍政との停戦が破棄されると、チーク材5万トンと硬材2万トンが、山積みになされたまま森の中に置き去りにされた⁴²。

カレンニー州の森林が適切に調査されたことはない。また情勢が不安定な地域であることから森林の推定残存面積を確認するのも不可能である。しかし、ウェイジーダムによって水没する森林には、チーク(稀少な種類のものも含む)、鉄樹、双樹のような樹脂を含む木材、クマツヅラ科のグメリナ・アルボレアや白檀、沈香材木など様々な広葉樹があることが知られている。樹木に加え、珍しい野生のラン、キノコ、タケノコ、果物や様々な種類の食用・薬用ハーブがある。サルウィン川のタイ側で行われた調査では、流域の森林に少なくとも77種類のハーブと39種類の食用植物が見つかった⁴³。

サルウィン川とポーン川沿いの森林は水源に近いのでうっそうと生い茂り、野生の果物が多くほとんど人が住んでいないことから、野生動物の安定した棲息地域となっている。手つかずの森林は、動物の移動経路としても機能している。

鳥類

この地域でよく見られる鳥類は、クジャク、キジ、野生のニワトリ、キタカササギサイチョウ、オオサイチョウ、トビ、ワシ、フクロウ、キンバト、キツツキ、オウム、オウチュウ、ミドリサンジャクである。川の近くにはバン、ダブチック、シギ、コサギ、オオツルやハゲワシがいる。町や村落周辺にはインドトサカゲリやオオバンケン、オニカッコウ、フクロウ、スズメ、ハタオリドリ的一种、アマツバメ、ムラサキタイヨウチョウ、コウラウン、ウズラ、ヤイロチョウの一種、インドヨタカ、ヤマウズラがいる。

哺乳類と爬虫類

サルウィン川流域には、野ブタ、ホエジカ、水鹿、水牛、乳牛、熊、バイソンなどの大型哺乳類がいる。高地には虎や山ヤギが棲息しており、夜になると水を求めて山を下りて川に来る。流域で見られる小型の野生動物には、何種類ものサル、ネズミ、リス、クロオリス、キツネ、ウサギ、ヤマアラシ、モグラ、ブタバナアナグマやベンガルヤマネコがみられる。川岸にある天然の岩塩や野生の果樹、小川の上流は、動物が集まる場所である。ここに大型の哺乳類動物が小型動物を狩りに来る。多くの洞窟がある深い森には、コウモリをはじめとする多くの飛行性哺乳類が住む。サルウィン川には様々な種類のヘビ、ナイルオオトカゲ、トロピドウルス亜科のトカゲ、センザンコウなどの無脊椎動物と爬虫類のほか、カワウソや様々な魚などの水生動物もいる。川には様々な種類のカメが棲息しており、川岸で産卵する。

40 (訳注) *Gazetteer of Upper Burma and the Shan States, Part II Vol I*, Scott and I Hardiman, 1901 (pp.100-101) によれば、当時サルウィン川の東部ではすでにチークが減少傾向にあり、主なチークの産出地はカレンニー州南部だった。

41 1989～94年にかけて、ビルマでの伐採権を持つタイの業者が、カレンニー州と隣接するメーホンソーン県を経由して輸入した木材は、チークと硬材61万803幹、74万2,917立方メートルに及ぶ。出典: *The Forest Protection in Mae Hong Son Area*, Wanchai Suworakul, Forestry Officer 6, Forest Resource Conservation Division, Mae Sariang Forestry Office, Royal Forestry Department, 1997。

42 KDRG による聞き取り調査 (No.15, 2005)。

43 *Thai Baan Research at the Salween: Villagers' Research by the Thai-Karen Communities*, 2005, www.searin.org。

第2章

バルーチャウン水力発電事業



©デーン・チャップマン

第 2 版

翠叶山花以水之也下千一也

バルーチャウン水力発電事業

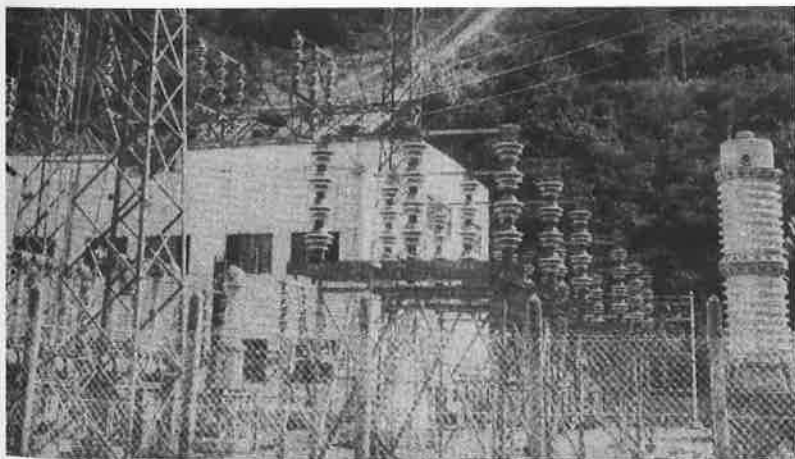
第1節 バルーチャウン水力発電事業とは

「第二次世界大戦後、日本政府は戦争中にビルマで行った残虐行為に対する戦後賠償を決定した。ペコンの南東 16 キロ（10 マイル）に位置するモビエと呼ばれる場所にダムが建設された。ダム湖に貯められた水はロピータ滝を利用する水力発電所に送られる。ロピータ滝は私が幼い時に様々な空想をめぐらした場所だ。ペコンはやがて郡に昇格したが、電気は来なかった」⁴⁴。

バルーチャウン川は⁴⁵、ビルマ・シャン州のインレー湖を水源とする。インレー湖の水はポーン川を経て、アジア有数の巨大河川であるサルウィン川に注ぐ。発電所が建設される前、バルーチャウン川は緩急をつけながら約 670 メートルの高度差を下り、ポーン川の深い渓谷に注いでいた。この落差が見事な 3 段のロピータ滝を形成している。

バルーチャウン川の滝と急流がある部分は長さ 19 キロメートルに及び、途中には奇妙な形に削られ、石灰岩に覆われた岩面から水がかなり下まで流れ落ちるところもある。滝の周辺には洞窟、ドリーネ、石灰岩の崖が広がっている。ダムの建設で水流の大部分が迂回するようになったため、今では滝がつくる自然美はほとんど失われてしまった。

バルーチャウン川の滝がつくる落差を水力発電に利用しようという計画は、1950 年に日本とビルマの両政府が交わした戦後賠償協定から生まれた。バルーチャウン発電所はビルマ初的大型水力発電所で、今なおビルマ中央部の電力源として重要な位置を占めている。発電所各部分の説明と建設の経緯は次のとおりである。



バルーチャウン第 2 発電所

出典：ミャンマー諸民族の伝統と文化（カヤー編）⁴⁶

⁴⁴ From the Land of Green Ghosts, Pascal Khoo Thwe, 2002.

⁴⁵ 「チャウン」はビルマ語で「大きな流れ」もしくは「小さな川」を意味する。「バルーチャウン」はビルマ語でバルー川という意味。英語では、現在は「バルーチャウン・リバー（川）」と広く呼ばれている。

⁴⁶ （訳注）ビルマが社会主義時代に政府が編纂した本。

第2節 バルーチャウン水力発電所

第1項 発電所の各部分

モビェダム・貯水池

モビェダムは、発電用の水を確保するためバルーチャウン川に建設された。建設に関わった人物によればダムは高さ 11 メートルで、カレンニー州とシャン州の州境にあり、貯水池のほとんどはシャン州内にある。貯水池はインレー湖から始まり約 60 キロ下流までつづく。幅は平均 3～5 キロ、面積は約 207 平方キロメートルで、インレー湖よりも 25% 大きい（地図 7「インレー湖とモビェ貯水池」を参照）⁴⁷。

バルーチャウン（ロピータ）第2水力発電所

発電用の水は貯水池から水路を通して第2発電所に流れる。「第2発電所」という名称だが、第1発電所より早く稼動を開始した。第2発電所は二段階に分けて建設された。6つのジェネレーターが設置されており、合計で 168 メガワットの定格出力を持つ。ロピータ滝の最上部に位置し、ダムからは約 40 キロ東にある。発電所は地元では「ロピータ第1・第2発電所」として、国際的には「バルーチャウン第1・第2発電所」として知られている。

ドータチャダム

モビェダムよりも小さく、発電所のより近くで水を貯め、水量をよりよく調整するために建設された。

バルーチャウン（ロピータ）第1水力発電所

第2発電所の近くにあるが、ドータチャダムを水源としており、定格出力は 28 メガワットである。

送電線

生産される電力は全長 402 キロメートルの高圧電線によりラングーンに、全長 400 キロメートルの高圧電線によりマンダレーに送られている。

第2項 着工スケジュール

- | | |
|-----------|---|
| 1954 年 | 日本政府が戦後賠償の一部として発電所建設予算を承認、施工可能性調査と設計調査が開始。 |
| 1960 年 | 第2発電所建設の第1段階が完了。 |
| 1962 年 | モビェダムの建設が始まるがラングーンでのクーデターのため中断（第1章3節1項「ビルマ」を参照）。住民に立ち退き命令が下るが、ほとんどが命令に従わなかった。 |
| 1966 年 | モビェダムの建設が再開。労働者 2,000 人がビルマ中央部から派遣される。地元住民に就業機会は与えられなかった。 |
| 1970 年 | モビェダムが完成。 |
| 1970～72 年 | モビェ貯水池の水位が上がるに従い、シャン州ペコン郡の住民 8,000 人が立ち退きを余儀なくされる。 |
| 1974 年 | 第2発電所建設の第2段階が完了。定格出力が 168 メガワットとなる。 |
| 1986 年 | 第1発電所の建設が開始。 |

47 Historical Record and Kayah State, U Khin Maung, Information Officer for Kayah State, 1971, p.53.

1988～92年 モビェダムより小規模のドータチャダムの建設が開始。1992年に完成。

1992年 第1発電所が完成。定格出力が28メガワットとなる。

現在 第3発電所の建設計画があるが、安全上の懸念、技術的問題、資金不足のため実現には至っていない。

第3節 だまされた住民～メリットのない建設事業

建設当時の新聞には、発電所には大きなメリットがあるとの記事が載った。選挙演説や地元当局の説明では、灌漑の整備と電力供給、発展が約束された。ロイコー出身の農民たちは、1974年の選挙演説でビルマ社会主義計画党（BSPP）カヤー州支部のラソー議長が「皆さんの低い生活水準を標準まで引き上げるために、ロピータの水力発電所が町と村に電力を供給します」と言っていたのを覚えている⁴⁸。

モビェダムがもたらす恩恵について、1969年に国営新聞は次のように伝えている。

「未開の土地が近代的な住居によって新しい生活様式を取り入れることで、原住民は家や土地を所有ようになる。本連邦に発展をもたらし、連邦制を実のあるものとする社会主義経済の成果なのだ」⁴⁹。



バルーチャウン第2水力発電所の図

別の国営新聞には次のような記事が出た。

「ネウウィン政権は、ビルマ連邦と各州に平等に利益をもたらす政策を打ち出し、開発も平等に行われるように努力している。バルーチャウン水力発電所の拡大が行われれば、発電だけでなく、100平方キロメートル（2万5,000エーカー）以上の休閑地が灌漑され、農業が可能になる。また、モビェとカヤー州の住民への雇用創出にもつながる」⁵⁰。

48 KDRGによる聞き取り調査（No.8, 2005）。

49 BERG 2000, p.64.

50 テインパーシン「素直に言おうではないか」（“Let's Say Openly”）『ボータッタ』紙、1969年6月21日。Historical Record and Kayah State, U Khin Maung, 1971, p.62. より引用。

こうした展望や約束が実現することはなかった。発電所の拡充はカレンニーの人々に発展をもたらすどころか、発電用が水を使うためかえって水不足を招き、水という貴重な資源を農民が管理できない状況を作り出した。ダムからの放水によって、作物が台無しになることもあった。周辺の町や村へ電気を供給するという約束も実現されることはなかった。送電線により電気はビルマ中央部にまっすぐ送られ、カレンニーの人々は暗闇に取り残されたままである。

第1項 建設前後の水の使用

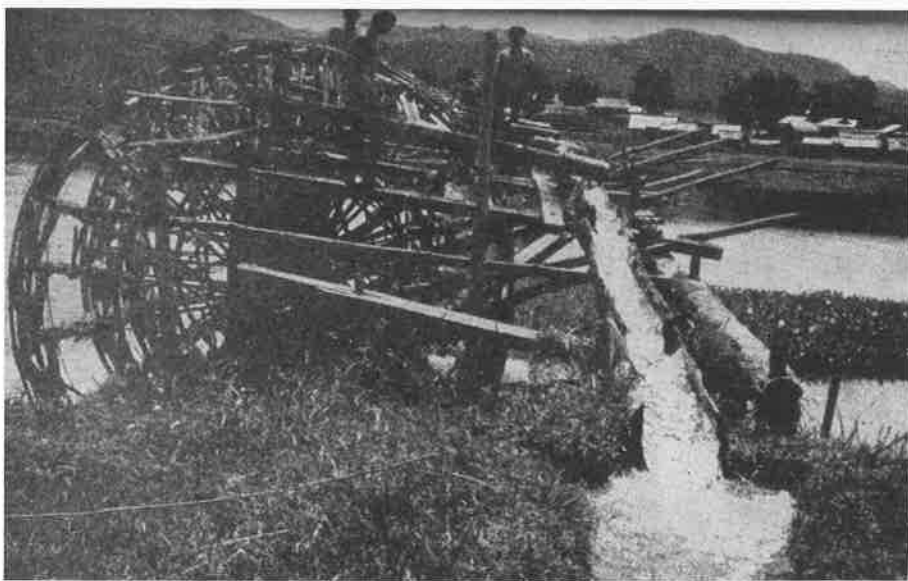
パルーチャウン川は、シャン州ペコン郡にあるインレー湖に発し、川は密林の水源林、澄んだ小川、豊かな土地がある260平方キロメートルの地域を通してロイコーに入る。流域に住むシャン・カレンニー州の人々は自給農業を営み、川の入り江や小川で魚を獲って栄養を補っていた。

ダムができる前、地元住民は、パルーチャウン川に流れ込む多くの支流から農地に水を引いていた。パルーチャウン川本流でも、下流の方には灌漑用の水車が設置されていた。ある住民は、モビエダムが建設される以前の水利利用について「小川に手で掘った小さな貯水池から、年間を通して農地に水を引くことができた」と語っている⁵¹。

1980年代に8年間、第2発電所で機械工をしていたある住民は、水の利用方法がダム建設の前後ではっきりと変わった様子を説明した。

「私はこの地域の農家で育ちました。発電所とダムができるまでは、上流で水不足になることはあまりありませんでした。増水時にはパルーチャウン川本流から水を引く必要もありませんでした。代わりに森からの流水やパルーチャウン川に注ぐ小川の水を使うことができました。水位が下がった時にだけ、元からあった水車を使って農地に水をくみあげました。森林が開かれ、ダムが建設され、発電所の運転が始まってから起きた変化は信じられないほど劇的なものでした。特に乾期には水が足りないようになりました。十分な食糧が手に入らない時もありました」⁵²。

当局は、農民のニーズよりも発電を重要視する方針をはっきりと打ち出した。第2発電所ができてからは、水位が下がった場合は特に、農民は必要な水をパルーチャウン川から水車でくみ上げることを許されなかった。世代を超えて使われてきた昔ながらの水源利用システムが禁止されたことで穀物の生産量が落ち、従来の自給農業システムが崩壊した。ビルマ軍政と発電所のエンジニアが、地元の住民や農民に相談することなく、川の水の利用方法を一方的に決定した。



伝統的な水車 出典：ミャンマー諸民族の伝統と文化（カヤー編）

「1986年と87年は水量が少なかったもので、発電用の水が足りませんでした。発電所の上流では、特に灌漑のために取水する住民を対象として厳しい利用制限が課されました。こうした規制は、発電所の様々な部局にいるエンジニアが、効率よく発電するために必要な水量に基づき決定していました。機械・灌漑部門のエンジニアが、水の管理計画案を当局に提出するのです。それを受けて政府からしかるべき命令が下されます。例えば、農民や住民は発電所上流での取水が禁止されました。ラングーンやマンダレーへの送電が優先され、地元住民や農家の生活は二の次にされたのです」⁵³。

51 カレンニー開発調査グループによる聞き取り調査（No.5, December 2004）。

52 Images Asia による聞き取り調査（No.16, 2001）。

53 Ibid.

水利用の規制により多くの問題が起きた。

「農家や住民への影響はすぐに表れました。農民は川から水を引くことが出来ず、住民は生活に必要な水を得られなくなりました。夜間に数時間水をくみ上げて農業用水や生活用水を確保する人もいました。発電所で水位を測定するエンジニアがこれに気づき、昼夜ともに川辺のパトロールを始めました。水をくんでいるのを見つかることもありましたが、中には住民をトラブルに巻き込みたくないと感じて、水をくみすぎないようにとか、今後はくまないようにと注意するだけの人もいましたが、農民や住民に同情を示さず、口止め料を要求する人もいました。支払わなければ当局に告発され、水をくんだことを理由に厳しく罰せられることになります」⁵⁴。

1997～98年は、ビルマのほとんどの地域を襲った厳しい干ばつにより、ダムの下流の農民は壊滅的な打撃を被り、飲料水も不足した。ある農民はこう述べた。

「1998年に干ばつがありました。発電所の取水が優先されたので、バルーチャウン川から引いた水路の水を農地に引くことができませんでした。つまり、雨が降らない限り水が手に入らなかったわけですが、それだけでは水が足りませんでした。カレンニー州ロイコーとシャン州タウンジーを結ぶ道路の西側では、風車で水をくみ上げてバルーチャウン川の兩岸の農地に水を引いていました。しかし1998年以降、これも禁止されました。地元当局は、より多くの水を発電所に送るために灌漑用水路1本を塞ぎました。川から水をくめなくなったので、作物の収穫ができませんでした」⁵⁵。

Box 1: ドータチャダム

乾期に水を確保し、水流を調整するため、1988年に2つ目のダムであるドータチャダムの建設が開始された。水がドータチャ貯水池に引かれ、発電に使われた。このため貯水池より下流にある田畑には水が行かず、上流にある農場は洪水に見舞われた。ドータチャ村周辺の農地24平方キロメートル(600エーカー)が水没し、貯水池よりも上流にあるワンコン、ローリヤリ、ロイビ、マイカン、タタブル、マトークなどの村々は、水不足のため休耕地となり、現在では広大な地雷原となっている。

ビルマ軍とカレンニー民族進歩党(KNPP)の紛争が継続したため、伝統的な高地農業も続けることができなくなった。

「伝統的な焼畑農業はできなくなりました。農作業のため山に入る必要があるのに、兵士がそれを許さないからです。兵士は山の中で農民を見かけると、農民に嫌がらせをします。農作業ではなく、カレンニー軍と連絡をとったり、カレンニー兵に食糧を提供しに山に入ったのだということです。焼畑農業ができないので、8、9年前に持ち物の多くを売ってヴィセクの近くに良い土地を買いました。しかし今度は1998年に灌漑水路が閉鎖されてしまいました。最終的には財産も田畑も失ったのです」⁵⁶。

発電所周辺に住む住民が直面したのは、水の利用の規制だけではない。

住民の指摘によれば、ダムが完成してから、洪水や干ばつによって壊滅的な被害が出るようになった。雨季にダム湖の水が放水されると自然には起こりえない洪水が発生し、作付けした作物が台無しになる。ある男性は、貯水池の下流に農地を持っていたおじが直面した出来事を次のように語る。

「おじは、私の家の近くのピャピュに住んでいます。バルーチャウン川沿いに約28平方キロメートル(70エーカー)の農地をもっています。今年(2001年)の初めもそうでしたが、3、4年前から毎年、雨季になるとおじの土地は洪水に見舞われました。洪水は田植えをしてから起こるので、稲はだめになります。皮肉にもここ数年は干ばつが長引き、乾季にも例年とちがってほとんど雨が降りませんでした。おじの土地は、毎年洪水に見舞われます。自然に起こる洪水は新しく植えた稲の灌漑用水となります。しかし最近の洪水は不自然なものです。おじによると、これらの洪水は、バルーチャウン川の上流にあるモビエダムの放水に合わせて起きています。雨季にはただでさえ水が多いのに、加えて放水があると川から水があふれ、下流の農場にも押し寄せます。放水を行う当局は、おじに相談することも、放水時に注意を呼びかけることもありません。放水によっておじの農地は台無しになり、生活が脅かされています」⁵⁷。

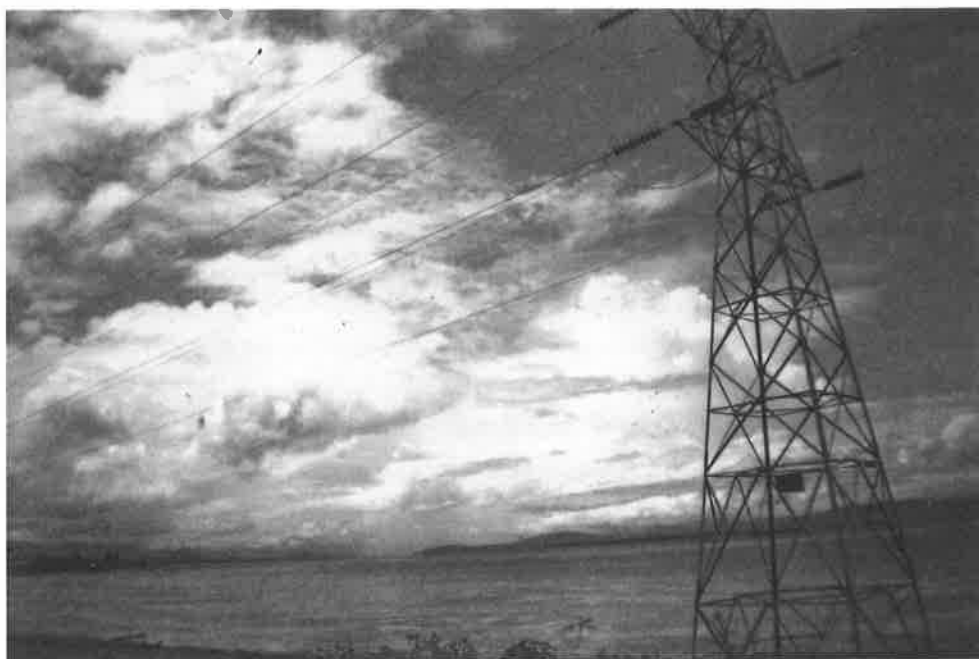
54 Ibid.

55 メコン・ウォッチによる聞き取り調査(No.23, 2001)。

56 メコン・ウォッチによる聞き取り調査(No.23, 2001)。

57 Images Asiaによる聞き取り調査(No.25, 2001)。

第2項 電力の行き先



モビエ貯水池の傍に立つ送電塔 提供：カレンニー開発調査グループ

約束とは裏腹に、カレンニー州のほとんどの地域に電気は来ない。パルーチャウン水力発電所が生産する電力の大部分は、高圧電線でビルマの二大都市ラングーンとマンダレーに送られる。発電所に近いマートク村落区には7村、ロピータ村落区には13村ある。これらの村々は発電所の特別警備地域内にあるものの、電気を引こうという話が出たことはない。マートク村のある住民は次のように語る。

「この村は、第1発電所から約1.6キロ（1マイル）も離れておらず、高圧電線の真下にありますが、電気はありません。ビルマ軍兵士と

発電所の職員の家にだけ電気が引かれています。彼らは無償労働を強制します。発電所のために私たちの農地を接収した後でも、ひっきりなしに、『寄付労働』に駆り立ててきます⁵⁸。今日まで何の補償も受けていません。それなのに未だにマートク村落区の7つの村には電気が来ていません」⁵⁹。

カレンニー州ではロイコー、ディモーソー、プルソーの3つの町にごくわずかの電力が供給されているだけで、農村部には電気がない。町に電気が来ているというのも名ばかりで、十分な供給があるのは軍の駐留地、省庁、官舎と有力な商人の住居に限られる。一般市民のところには低圧線が引かれているだけだ。ディモーソーで家に何とか電気を引いてきた住民は次のように言う。

「電気がくると言っても名ばかりです。家に見に来てくれればわかります。午後6時から午後10時か11時まで、電球の明かりはトマトよりも少し赤いくらいにしかありません。深夜からは、いつもの状態に戻ってしまいます。電圧が低いので、炊飯器は使えませんし、アイロンをかけたりビデオやカセットテープをかけることもできません。お金持ちは、自家発電機を買えるので何の問題もないのですけれども」⁶⁰。

電気が平等に供給されていないだけでなく、電気料金も不平等である。軍政関係者は1ユニットあたり1.5チャット⁶¹払えばよいが、一般市民は25チャットの標準料金を請求される⁶²。一般市民にとってはかなり高額なため、電気を引ける人はほとんどいない。

58 「ローアペイ」は、元々功德を積むことを目的として地域社会のために行う労働力の寄付を指していた。しかし、現在ではビルマ軍政やビルマ軍が住民を強制労働に呼ぶ際に用いている。

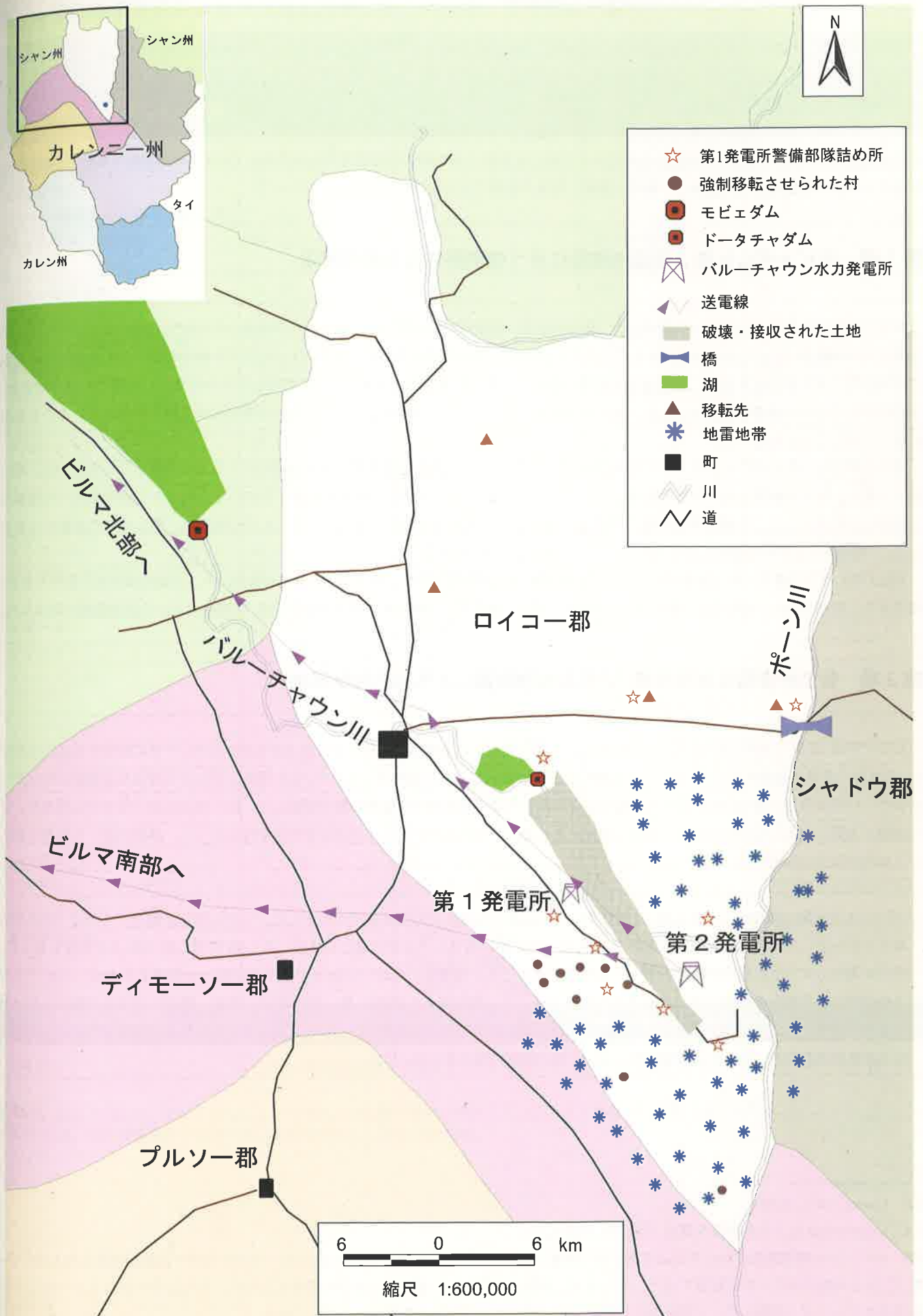
59 カレンニー開発調査グループによる聞き取り調査（No.1, 2005）。

60 カレンニー開発調査グループによる聞き取り調査（No.2, 2005）。

61 チャットはビルマの通貨。インフレが激しいため本報告書では、変動の激しいドルへの換算金額ではなく、支払いの差額を比べられる現地通貨で表記する。

62 カレンニー・エヴァーグリーン（KEG）による電力使用に関する調査（2001年ロイコー）。

地図8: バルーチャウン水力発電所建設による影響



第4節 バルーチャウン水力発電所建設に伴う強制移住

地域開発と電力供給の約束が反故にされたのに加え、発電所用に給水するモビエダムとドータチャダムの建設によって、シャン州、カレンニー州の多くの住民が農地や食糧採集場、また村から強制的に追い立てられることになった。以下ではこの45年間に行われた発電所建設に伴う強制移住の状況を述べる。

ロピータ村は2つの地区からなっており、カヤー民族とシャン民族がそれぞれの地区に居住し、人口は合わせて約2,000人だった。村は発電所から2キロも離れていない。ロピータと同じ村落区にある他の村は発電所から平均して約6キロ離れていた。発電所が建設される以前、住民はおもに低地での輪作、畜産、狩猟や漁業で生計を立てていた。

第1項 モビエダムと第2発電所建設に伴う強制移住と土地の接収

ロピータ地域の多くの世帯は、労働者宿舎、職員の住居、建設資材の保管場などのインフラ建設のために立ち退きを命じられた。約2,000人の労働者（主にビルマ中央部からのビルマ人に加え、日本人やスイス人、国連のエンジニア）が雇われ、この地域に住居をあてがわれた。ダムが完成すると、当局は地元住民の農地を、永住することとを条件に（地域外からやって来た）労働者に割り当てた。元の所有者はなんの補償も受けないまま、ビルマ中央部からやってきた労働者に対して、政府が農地の所有権を約束していたことになって知ることになる⁶³。

住民の中には、貯水池の水位が上がって水が村に迫ってくるまで状況が分からず、水が玄関先にくるまで避難しない人もいた。地元筋によると、貯水が始まった1972年には、シャン州ペコン郡の8,000世帯が移住を余儀なくされた。失った土地や生活への補償は一切提示されなかった。住居に関しては、一律327チャットの補償金の提示があった。ほとんどの住民は、怒ってこれを断わったという。「階段を用意するお金にしかない」という声がよく聞かれた⁶⁴。

1963年にペコン郡で、地元指導者による反ダム建設委員会が結成された。委員会は抗議文を数通送り、当局の関係者と面会したが、逮捕すると脅かされた。最終的に、他に手段がなかったため、委員会は1964年にカヤン新領土党（KNLP）という武装組織を結成した。

第2項 発電所警護にあたる第72歩兵大隊駐留にともなう強制移住

ビルマ軍第72歩兵大隊は約500人の兵士からなり、第2発電所と送電塔を警備するため1974年からロピータに駐留するようになった。同大隊の基地を建設するため、ロピータ地域の住民約400人が立ち退きを命じられた。立ち退きにあって移住先は指定されなかった。住民は自力で付近の村に移った。時間が経つにつれ発電所職員や労働者の数が増加した。彼らは自給用の畑を作っており、その面積が次第に拡大していったため、住民の畑が小さくなり、住民はさらに遠くに移動せざるを得なかった。移動を強いられた住民の一人は次のように説明する。

「第72歩兵大隊の基地をつくるため、1970年に2つの村の住民に立ち退き命令が出ました。しかし移住が始まったのは1973年になってからでした。再定住先は指示されず、とにかくどこかに移住しろとだけ命じられました。80世帯の約400人が移住しました。移住にあたって、3世帯に一台のトラックが用意されました。補償金として、100チャット受け取った世帯もあれば、200チャット受け取った世帯もありました（200チャットは当時、牛一頭を買い取る金額）。失った財産や、家畜、農地に対する補償がなかった人も多くいました。移住先のジャカネに到着しても、新居を建てたり、農地を耕すための補助は一切ありませんでした。ジャカネには人が多すぎたので、私たちは親類が住んでいる別の場所に移りました」⁶⁵。

63 Maung 1971, p.36.

64 Images Asia による聞き取り調査（No.18, 2001）。

65 カレンニー開発調査グループによる聞き取り調査（No.3, 2005）。この男性は始めは、ロピータ村のカヤー民族居住区に住んでいた。第72歩兵大隊がロピータに駐留すると、ジャカネに移動させられた。後にテートクへ移動させられ、さらにその後ロイコーの近くにある移住キャンプへ移動した。1996年に、彼はタイ・ビルマ国境にある難民キャンプに入った。

表2：強制移住および立ち入り禁止対象となった村落、世帯数と人口

村名	世帯数（人口）	移動年	理由	村落区／郡
第1・第2 発電所による影響				
ロピータ（カヤー地区）＊	40（250）	1973 年	第2 発電所建設	ロピータ／ロイコー
ロピータ （シャン地区もしくは中心部）＊	30（180）	同上	同上	同上
ティトク＊	36（220）	1990 年	第2 発電所周辺の立 入禁止区域内にある	同上
ビャーカネツ＊	18（95）	同上	同上	同上
ドーソーシェ＊	30（155）	同上	同上	同上
ドークリ（別名カンニ）＊	20（115）	同上	同上	同上
ドーウィモ＊	30（160）	同上	同上	同上
ザヤピュ	30（150）	同上	第1 発電所周辺の立 入禁止区域内にある	同上
ドーシェー	27（103）＊	同上	同上	同上
レイエインス	7（40）	同上	同上	
ソラスイ	28（150）		第2 発電所周辺の立 入禁止区域内にある	同上
ドーカトゥー	60（356）	同上	同上	同上
ティタガー＊	18（95）	1990 年に立ち入り禁 止、1996 年に移動	同上	ティタガー／ロイコー
タポー＊	16（70）	同上	同上	ドーブ／ディモーソー
ブリャ＊	47（247）	同上	同上	同上
マトーク上流	70（300）	1986 年	第1 発電所周辺の立 入禁止区域内にある	マトーク／ロイコー
マトーク下流	20（98）	同上	同上	同上
タタプル	40（180）	同上	同上	同上
ワンゴン（別名ドークルク）	30（152）	同上	同上	同上
ドーリャレー	35（180）	同上	同上	同上
ロイフィー	20（106）	同上	同上	同上
ドータマ	30（145）	同上	同上	同上
ドータチャ（パオー地区）	60（285）	1986 年（電力供給あり）	同上	チーケイ／ロイコー
ドータチャ（カヤー地区）	65（312）	同上	同上	同上
ドータヨー＊	37（187）	1990 年に立入禁止、 1996 年に移動	同上	パラウン／ロイコー
パラウン	48（227）	1990 年に立入禁止	同上	同上
モビエダムによる影響				
114 村	1,740（推定 8,000）	1969 ～ 1972 年	貯水池建設	シャン州ペコン郡

発電所により 4,558 人、モビエダムにより 8,000 人が影響を受け、合計 1 万 2,558 人が強制的に移動させられた。

＊印の村は、住民が移動させられた村。その他は立入が禁止された村。

第3項 第1発電所建設にともなう強制移住

1980年代には、第1発電所の建設のためカレンニーの農民が何の補償もなく土地を接収された。地元農民は、当局に嘆願書を提出したが効果はなかった。

「発電所が建てられるなんて知りませんでした。ある日、村長が集会を開き、間もなく発電所（第1発電所）が建設され、土地が接収されると言いました。気が動転した住民もいました。すでに畑に作物を植えていたからです。村の代表者たちがロピータにある政府の事務所に抗議に行きましたが無視されました。広い土地をもつ住民、教師、バナナ園の所有者が村長と共に政府の事務所を訪ね、すでに作付けが終わっていることを説明しました。土地を奪われなくなかったのです。当局は、計画はすでに固まっており、いかなる抗議も受け付けないと言いました。異議を申し立てようということで、村では1か月のうちに二度も集会が開かれました。他の村も同じようにしましたが、結局集会をしてもどうにもなりませんでした。建設機材が運びこまれ、私たちは土地を奪われました」⁶⁶。

第4項 立ち入り禁止区域宣言にともなう強制移住

周辺住民や反政府武装組織は、地元の資源（バルーチャウン川の水力）がもたらす恩恵が地域住民に公正に分配されないことに気づいて憤慨した。このため武装組織側は、発電所から引かれた送電線の鉄塔を散発的に攻撃し、発電所周辺ではカレンニー民族進歩党とビルマ軍との小競り合いが頻繁に起きるようになった。1980年代にはカレンニー民族進歩党勢力が発電所の警備部隊を定期的に攻撃し、1990年にさらに攻撃をしかけた。これを受けてビルマ軍政は発電所周辺の村から住民を退去させ、一帯を「立入禁止区域」とし、多くの地雷を埋設した。

カレンニー民族進歩党勢力は1990年5月、送電線の警備にあたる第72大隊を重砲で攻撃した。その後まもなく軍政は5つの村⁶⁷に対し、一週間以内に移動するよう命令した。住民には一切の援助もなかった。立ち退き命令のことを耳にして、付近に住む親族がビルマ軍政に支援を求めたが、また聞き入れられなかった。

「1990年に私たちの家族は再びビルマ軍から移住を命じられました。今度は前回より遠くロイコーまで移らなければならない、7日の猶予しか与えられませんでした。ビルマ軍の兵士は1974年の移住命令の時よりもずっと乱暴で、よく暴力をふるいました。今度も何の支援もなく、住民は家畜など持ち運びの難しい財産のほとんどを失いました。土地や住居への補償は一切なく、私たちに残っていたものはビルマ軍がすべて横取りしたことを後になって知りました。（7日の猶予があるはずなのに）実際ビルマ軍は移住命令が出てから3日後に来ました。とても横暴に振る舞い、調理器具などを蹴ったりして、とにかく早く出ていけと脅迫してきました。多くの住民が家族の食糧を準備する時間もなく、将来の不安にさらに追い打ちをかけました。人々は怒り、泣き、脅えましたが、こうして暴力で脅してくるビルマ軍に従うほかありませんでした」⁶⁸。

第5節 バルーチャウン水力発電所周辺の兵員拡大にともなう人権侵害

1961年に第2発電所建設の第1段階が終わると、ビルマ政府は第54歩兵大隊をロイコーに駐留させ、兵力を700～1,000人に増強した。ビルマ軍はロイコー、ディモーソー、プルソー、パサウンの町や、モーチーにあるスズやタングステン鉱山の鉱山、またバルーチャウン発電所など財政的に重要な地域に駐留した。当時はカレンニー抵抗勢力がカレンニー州の農村部を事実上支配していたことから、ビルマ軍は市街地と発電所の安全に大きな懸念をもっていた。この懸念が原因となって軍備が増強され、ビルマ軍兵士による人権侵害が深刻化した。

66 メコン・ウォッチによる聞き取り調査（No.10, 2002）。

67 テートク、ドーソシャイ、ビヤカネ、ドークリ、ドーウェモーの5村で、134世帯745人が居住していた。

68 カレンニー開発調査グループによる聞き取り調査（No.4, 2005）。

第1項 強制労働とポーター

国際労働機関（ILO）の調査委員会は1998年、ビルマで広範で組織的に強制労働が行われていると指摘した⁶⁹。翌1999年、ビルマ軍政は「命令1/99」を出し、「奉仕」労働やポーター（荷物運搬人）をさせた者を罰するように軍隊に命じた。しかし各大隊の司令官は命令を無視し、今でも強制労働を課し、ポーターを徴用している。カレンニー州のビルマ軍が駐留しているところでは今日も頻りに強制労働が使われている。軍隊は市民に兵舎の建設、塹壕掘り、駐屯地のフェンス建設をさせ、建築資材となる棒や竹、水やその他調理に必要なものを提供させ、駐屯地周辺の整地、道路のパトロール、使い走り、軍の農園での作業などを手当なしで強制している。住民はあらゆる強制労働をし、労働に必要なものはすべて自分で負担しなければならない。従わない者には重い罰金が科せられる。強制労働をとりしきっていた元ビルマ軍兵士は、自身の体験を次のように語る。

「第72歩兵大隊では強制労働は当然のこととされていました。少佐が近くの村からそれぞれ20人を出すように命令します。住民を集団で移動させ、どこへどれくらいの期間行くのかを教えない時もありました。行きたくない住民は、金を払わされました。労働にも行かず金も払わなかった者は、殴られるか銃で撃たれます。これが理由で複数の人が殺されるのを目撃しました」⁷⁰。

駐屯地での「奉仕労働」に加え、ビルマ軍は民間人にポーターとなることも強要した。経験者によると、ポーターは軍の装備や弾薬の運搬を命じられ、前線の地雷原では先頭を歩かなければならなかった。何度もポーターをしたある人は「米や弾薬、武器を運ばされることがほとんどだった」と言う⁷¹。

複数のビルマ軍大隊がカレンニー州に駐留したので、ポーターとして使われることを生活の一部としてとらえる住民もいた。「ドーペ村とテーポカロ村にいたとき、頻りにビルマ軍がやって来て、何度もポーターをやらされました。何百回もやったと思います」⁷²。

拷問や地雷、栄養不足と健康状態の悪化によって病気にかかり、多くのポーターが死亡した。「荷物を運べなくなったポーターがビルマ軍兵士に殴られて死ぬのを見たことがあります」⁷³。

住民には自分の農地を耕す時間がなくなり、畑を放置せざるを得なくなった。生計は様々な形で大きな影響を受ける。

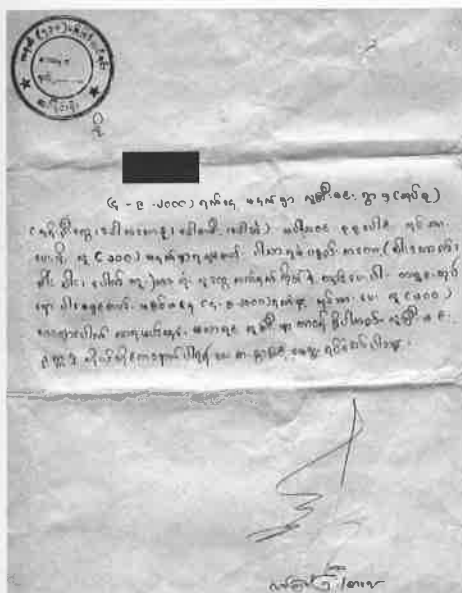
2000年にILOがビルマで調査を行った後、ビルマ軍政は強制労働という不正が行われている事実を隠すため、強制労働やポーターとして働かされる人のことを婉曲的に「ボランティア労働者」や「愛国的労働者」と呼ぶようになった。しかし、ボランティア労働者にも愛国的労働者にも食糧が与えられることはなく、断った者は罰金刑や禁固刑を受けた。

（第530歩兵大隊印）

XXX（村長）宛

2000年4月9日に村落区（A村、B村、C村、D村を含む）から100人の労働者を提供せよ。労働者は鍬、なた、ナイフを持参すること。米（食糧）も持参すること。指定した日時に必ず労働者100人が来なければならないことを強調したい。もし来なかったらその責任は村長にある。村長も労働者100人と共に来るように。

XX 軍曹



「ビルマ軍政は労働者のことをポーターとはもはや見なしていません。かわりに軍政は労働者のことを『国や国民のために奉仕』する『ボランティア』や『愛国者』だと呼ぼうとしました。しかし、私たちは以前と同様にこき使われ、断れば罰金を払わされました」⁷⁴。

⁶⁹ Report on Labor Practice in Burma, U.S. Department of Labor, Bureau of International Labor Affairs, 1998, p.40.

⁷⁰ Images Asia による聞き取り調査（No.13, 2001）。

⁷¹ Images Asia による聞き取り調査（No.20, 2001）。

⁷² Ibid.

⁷³ Ibid.

⁷⁴ BERG 2000, p.69.

Box 2：ロピータに駐留するビルマ軍兵士の回想

この兵士は1996年にタイ側の難民キャンプに到着した。彼はビルマ軍第72歩兵大隊所属で、1991年から1996年まで発電所の警備にあたっていた。

「第72歩兵大隊の任務の一つは、水力発電所周縁の警備でした。発電所を囲むフェンス沿いを監視し警備するのです。その地域にはたくさんの地雷が埋められています。時々住民が地雷を踏んでも、兵士は住民を助けようとしませんでした。ある時、住民自身が踏んだ地雷の代金を払わされているのを目撃しました。

この地域で働いた5年間に、多くの住民、家畜、ビルマ軍兵士までもが地雷で死傷するのを見聞しました。パルーチャウン第1発電所が完成してからはさらに、多くの人々が地雷で負傷したり死亡したりしました。住民は発電所予定地の整地のためにかり出されました。一日40チャットを受け取った人もいましたが、ほとんどは強制労働です。そしてやらされる作業には、地雷の除去もありました。

私が任務にあたった地域では、どこでも強制労働がみられました。住民は、フェンスの設置や道路建設、穴掘りなどを強制されます。ビルマ軍は特定の作業をするよう住民に命令するのです。作業が終わると別の作業が命じられます。住民は一度に2週間も働かされることが多くありました。重労働に対して食糧、水、賃金は支給されませんでした。一日の休憩時間もわずかです。こんな状態は私がビルマを出た1996年にも続いていました。

地雷と強制労働がどんなに住民を苦しめているかが分かりました。肉体的に苦しめるだけでなく、カレンニーの土地をビルマ軍が奪い取ったことで住民が耕し食糧を集め、家を建てることができなくなるのです。住民の生活は苦しくなり、生存すること自体が一仕事になっていきました。しかし、私はビルマ軍の兵士であっても何もすることができませんでした。政府の方針に背くことへの報復も厳しかったからです。

政府の方針の一つは、住民を地域一帯から追い出すことでした。1992年頃、ジャカネ村は完全に無人化させられました。住民はロイコーのすぐ外に強制的に移住させられました。猶予は7日間しか与えられず、一切の支援も、移動手手段の提供も、失った土地や財産に対する補償もありませんでした。去らなければならない人々を大変不憫に思いましたが、この時もビルマ軍の決定に従い、任務を遂行しなければなりませんでした。

ビルマ軍政が出したもう一つの指示は、ビルマ軍兵士が地元住民と結婚するのを奨励することでした。奨励金として、結婚すると高官には3,000チャットが支払われました。

ビルマ軍にいた5年間、発電所周辺に残っていたほとんどすべてのカレンニーの村の住民が強制移住させられるのを目撃しました。同じ時期、同僚のビルマ軍兵士から多くのカレンニーの住民が殺害、強かん、拷問された話を聞きました」⁷⁵。

第2項 インフラ整備と軍用農場設置を目的とした土地の接收

貯水池、水路、導水管、送電線、発電所、そして発電所に通じる道路に使う土地は、所有者から無償で接收された。第2発電所の2本の放水路の建設でも、多くの住民の畑が奪われた。加えて、軍の基地や畑、鉄道と道路建設、特別警備地域設定のため、数十平方キロメートル（数千エーカー）の農地と土地が接收され、建造物を取り壊された。特に1982年には、第1発電所建設のために複数の村落⁷⁶の約3.64平方キロメートル（900エーカー）が接收された。

当局は土地を失った者に補償を出すどころか、もとの所有者に対し、軍のために無償で稲、トウモロコシ、大豆、ヒマワリなどを植え育てるよう強要した。住民の家畜が軍用農地に入ってしまうと、農地を荒らしたとして金を要求された。しきりに強制労働に呼ばれるので、住民は自分の畑を耕す時間がなく、村を捨てタイの難民キャンプに逃げるしかなくなった。難民キャンプにたどり着いたある女性 は、はっきりと次のように言う。

「軍用の農園で四六時中働かなければならず、自分の畑で作業する時間がありませんでした。このため作物は育たず、（食べるための）

75 Images Asia による聞き取り調査（No.10, 2001）

76 マトーク村（上流・下流）、ソラセ村、ドーチャ村、タタプル村、マイカン村、ワンウン村、ドーリャリ村、ドーカトゥ村、ローダレー村。

米を買わなければなりませんでした。とうとうどうしようもなくなったので、ここに来ました」⁷⁷。

第3項 恐喝、略奪、窃盗

1962年に始まったネウウィン政権時代から今日まで、様々な方法で民間人は財産を奪われてきた。官公庁職員さえ給料から様々な経費を差し引かれていく。カレンニー民族進歩党による報告書とカレンニー開発調査グループの調査によると、1988年以降に民間人が払わされた料金には、ポーターとして働かない場合に払う料金、ゲート通行料、軍の基金への募金、公営スポーツ大会の運営経費、道路や橋の通行料、火事見張り料、奉仕労働料のほか、農地や農業用水、作物にかかる税があった。

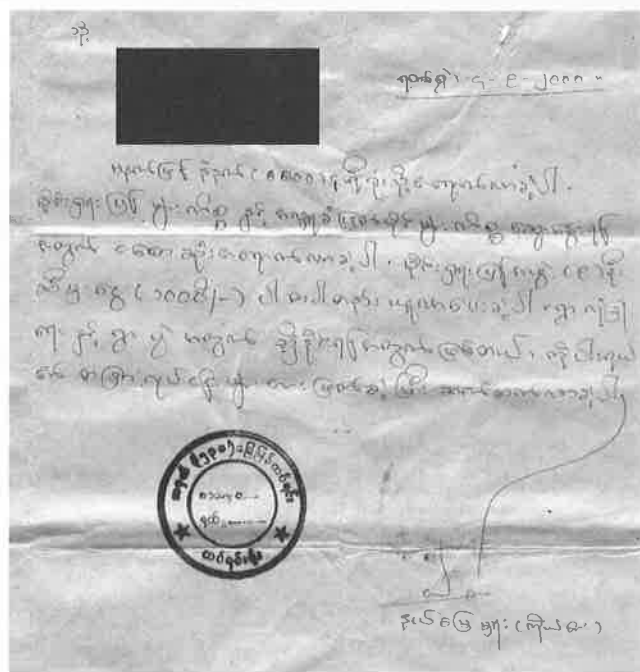
ビルマ軍兵士による強奪や恐喝、略奪は、地方や軍事活動の前線で広く起こっている。バルーチャウン水力発電所付近の住民から以下の事件について証言があった。

- 1993年5月21日、第72歩兵大隊所属の武装した兵士がマトーク村（上流地区）に入り、ゲリラがいると言ってあらゆる家を検索し、セーレーという住民の部屋を隈無く探し銀貨120枚を奪った。
- 1993年、マトーク村のコーレーは、第530歩兵大隊の兵士2人が庭の果物を盗んでいるところを見つけ、2人を咎めた上、息子たちに兵士を兵舎に帰させた。翌日、兵士2人が上官と共に村に戻ってきた。コーレーと息子を呼び出し、住民の前で彼らを5回ずつ竹の棒で殴り、帰っていった。
- 1994年、第530歩兵大隊の将校らが、第1発電所の近くにあるマトーク村落区内の10か村の各世帯に、大隊の基金のためとして500チャットを、ポーター料金として100チャットを支払うよう要求した。マトーク村落区はロイコー郡内にあり、普段から郡当局が月に3～4回ポーター料金として50～250チャットの支払いを各世帯に要求していた。それに加え、武装勢力が「緊急募金」を取り立てにやって来る。

雨季で雨量が多いと、当局はダム貯水池から放水した上で、農民に二期作をするよう命令し、耕作面積に応じて米や税を取り立てた。当局は米を流通価格よりもはるかに安い値段で買い取った。米が育たなかった場合、農家は市場価格で米を買って収めなければならなかった。通常、農家は一期作をするが、二期作を命じられるので土地がやせ生産量は減少した。



ビルマ軍に接収された土地に作られた「モデル農場」
提供：カレンニー開発調査グループ



2000年9月4日

XXX（村長）宛

明日午前8時に事務所に来るように。マيسー（ムーンズ）の鉱山から帰って来た者と寄付金の領収書について話し合いたい。鉱山から帰ってきた9人に1,000チャットの寄付をさせ、それを持参するように。金は村の祭りや警備に使う。他の仕事よりも優先させ、できるだけ早く来るように。

<地域警備担当者の署名>

⁷⁷ Images Asia による聞き取り調査 (No.116, 2001)。

第4項 ビルマ軍兵士による性暴力

ビルマ軍兵士が特に少数民族地域で起こす性的暴力や強かん事件については、すでに複数の報告書が存在している⁷⁸。ビルマ軍がカレンニー州で勢力を拡大するに伴い、女性に対する性暴力も増加している。

カレンニー州での性暴力の正確な実態を知るのは難しい。被害者の身の安全を確保する必要がある上、内容がデリケートであるからだ。カレンニー民族女性機構(KNWO)は2004年に調査と記録を開始し、これまでのところ1996年から2003年までに起きた29件の強かん事件について情報を集めた。強かんされた後、殺害された女性もいる。軍の担当者や郡当局に寄せられた申し立てはすべて無視され、被害者に救済の手は差し伸べられなかった。カレンニー州で、ビルマ軍兵士が強かん罪で裁判にかけられたり実刑を受けたりしたという記録はまだない。犯人は、罰として遠隔地に更迭されるだけである。

Box 3：発電所警備にあたるビルマ軍兵士が起こした強かん事件

2001年10月21日、妊娠7か月だったロイコー郡A村のBは、第530歩兵大隊の兵士6人に村の近くで強かんされ、殺された。彼女の親族と村の住民が、2日後に石灰岩を焼く土釜に放置されたBの遺体を発見した⁷⁹。

2001年10月28日、元C村落区長の娘(15)が、第72歩兵大隊の縦隊兵3人に強かんされた。事件を知った縦隊司令官は、3人は逃亡したと言い、事件について他言しないよう当事者を脅し、誰かが通報するようなことがあれば、通報者を投獄し報復すると脅迫した。それから司令官は、責任を逃れるため別の地域に移った。強かん犯の3人は、その後しばらくビルマ軍の駐屯地にいるのが目撃されていた⁸⁰。

発電所の特別警備地域内にあるテータンガ村に住むある母親は、自身の経験を次のように語る。

「テータンガ村に住んでいた頃、ビルマ軍が村にやって来て、男性全員を一つの家に集めたことがありました。こうすると女性だけがそれぞれの家に残りとても危ない状況になりました。とても怖かったです。自分の家で強かんされた女性もいました。義理の娘も強かんされそうになりました。兵士が村を略奪する間、どうしようもありませんでした。状況は厳しく、農村部に住む女性には安全は一切ありません」⁸¹。

ビルマ軍の元兵士の話にも、カレンニー州でビルマ軍兵が強かん事件を起こしていることが出てくる。

「1989年に、イエニボ村の近くで、第102歩兵大隊の将校が、少女を捕まえて強かんしようとしたのを目撃しました。近くにいた彼女の兄弟が助けにきました。将校は兄弟が近づいて来るのを見ると、彼を撃ち殺し、自責の念にとらわれることなく、少女を強かんしました」⁸²。

ビルマ軍政は、非ビルマ民族の女性と結婚した兵士に報償を与えた。つまり諸民族の女性は、軍政の「ビルマ化」政策を遂行するための手段にすぎなかった。これに関して、元ビルマ軍兵士が次のように述べる。

「ビルマ軍高官が、カレンニーの女性と結婚すると、女性側の合意がなかった場合でも特別な手当を与えられました。強かん事件も

78 *License to Rape: The Burmese Military Regime's Use of Sexual Violence in the Ongoing War in Shan State*, Shan Woman's Action Network, 2002, *Shattering Silence*, Karen Woman's Organization, 2004, and *Catwalk to the Barracks*, Woman and Child Rights Project (Southern Burma) in collaboration with Human Rights Foundation of Monland, 2005. (訳注) *License to Rape* についてはアジア女性資料センターによる日本語仮訳版「強かんの許可証：ビルマ軍政によるシャン州における戦時下性暴力の行使」<http://www.ajwrc.org/doc/LtoR>を参照。

79 Karenni Force Frontline News, 2001.

80 Voice of Karenni and Karenni Evergreen News Issue, November, 2001.

81 Images Asia による聞き取り調査 (No.26, 2001)。

82 Images Asia による聞き取り調査 (No.20, 2001)。

珍しいことではありませんでした。強かんされた女性は、村から追放されるかビルマ軍兵士に殺されました」⁸³。

1964年にビルマ軍がカヤン新領土党(KNLP)に対して攻撃をしかけた際、ペコンの近くで起こった事件は、カヤンの人々の脳裏に深く刻まれている。地元指導者の娘ウーマリーはたいへん美人だったが、ポーターとして働くためビルマ軍兵士に連行された。彼女は住民の目の前を歩かされ、有名な教会に連れて行かれ、そこで強かんされた⁸⁴。

第5項 徴兵制度と子どもの権利の侵害

1988年以前にビルマ政府はゲリラを一掃するという政策をとっていたが、これが住民の協力なしに実現不可能であることに気づき、民兵組織を結成するようになった。1973年にはロイコー、モビエ、ペコン、ディモーソーとプルソー各郡で民兵組織が結成され、構成員は1,500人を越えた。多くの子どもがこれらの民兵組織に入隊させられた。ビルマ軍にも入隊させられた。

しかし、1988年8月8日の民主化蜂起の際、ビルマ軍は民兵組織からすべての武器を回収し、正規のビルマ軍の兵力を拡大した。民間人を勧誘する担当のビルマ軍関係者は、ロイコー郡やディモーソー郡の息子のいる貧しい家族に対し、息子が入隊すれば事務職についたり大学や士官学校に行けるようになるなどと約束した。このような方法で、多くの貧しい子どもが状況をよく理解しないまま徴兵された。

第6項 迫害と超法規的処刑

カレンニー抵抗勢力が日常的に活動している地域は「黒エリア」とされ、カレンニー勢力の展開が疑われる地域とともに無差別発砲地帯とされた。無差別発砲地帯では、ビルマ軍兵士が住民を見かけると、ゲリラの案内人と見なして恣意的に銃撃した。またストレス解消のために罪のない民間人を襲撃することもあった。

ほかの地域では厳しく移動が制限された。タイに逃げたある農民は許可なく移動している者は拘束あるいは銃撃せよという命令が出ていた時のことを次のように語っている。

「私たちは自由な移動ができませんでした。許可なく(村から)数百メートル以上遠くへ移動してはいけませんでした。移動するには司令官の許可が必要でした。許可が出る時もあれば出ない時もありました。許可が出ない時、理由は示されませんでした。住民は許可なく出かけようとはしませんでした。許可なく移動したのが見つければ逮捕され、殺されるかもしれないからです。住民2人が許可を得ずに移動したため、他の住民の前で兵士から残忍に拷問され、撃たれるのを見たことがあります。1991年か92年には、出かけた住民が逮捕され森に連れて行かれました。私たちは彼の帰りを待ちましたが、帰ってきませんでした。探しに出ると、彼は射殺されていました」⁸⁵。

ほかにも恣意的殺害事件があった。

「1995年か96年、村の村長と補佐役がビルマ軍の兵士に殺されました。ある晩にビルマ軍が来て、住民全員を逮捕しました。村長と補佐役以外は解放されました。2人は森に連れて行かれ、殺され埋められました。私は遺体を発見したうちの一人でしたから、彼らが殺されたのをこの目で見たのです」⁸⁶。

ある元ビルマ軍兵士は迫害のやり方を説明した。

「ビルマ兵は尋問中にあらゆる手段を用います。例えば、カレンニー民族進歩党の動きを吐かせるためによく行われた拷問のひとつには、火のついた棒を用いるものがありました」⁸⁷。

83 Images Asia による聞き取り調査 (No.13, 2001)。

84 Images Asia による聞き取り調査 (No.18, 2001)。

85 メコン・ウォッチによる聞き取り調査 (No.3, 2001)。

86 Ibid.

87 Images Asia による聞き取り調査 (No.13, 2001)。

第7項 発電所と送電塔警備のために埋設された地雷による死傷者

「反政府勢力が送電塔を攻撃した。(中略) 政府はまるで球根を植えるかのように、送電塔付近に地雷を埋めた。家畜が地雷を踏み、私たちは農作業に使う雄牛と水牛を何頭も失った。地雷を踏んで死んだ子どももいた。それから軍は、地雷原の周りにフェンスを作るよう命令した。私たちは言われた通りにした。反政府勢力は地雷を撤去し、再び送電塔を攻撃した。ビルマ軍は地雷を埋め直した(以下略)」⁸⁸。



©ディーン・チャップマン

1990年までに、発電所の警備を目的として約1万8,000個の地雷が埋設された⁸⁹。武装組織の攻撃を防ぐために、送電塔の一本一本の基部にも埋められている。鉄塔付近の住民は、送電塔の基部を囲むフェンスを作るよう命令された。住民は今も地雷の見張りや地雷原周辺の整地をさせられている。

多数の民間人が発電所周辺に埋設された地雷を踏んで手足を失い、命を落としている。ロピータ地域では2001年現在、30人が死亡、50人以上が負傷、200以上の家畜が死傷した⁹⁰。カレンニー州全体での地雷による犠牲者の総数は明らかではない。カレンニー州に埋設された地雷は10万に上るとされる。1990年にはロピータ安全計画と称して、住民が強制的にヌワラボエへ移住させられた。ヌワラボエに移り住み、のち1996年に難民キャンプに到着した住民は、次のように語る。

「ヌワラボエは、駐留する2つの大隊の基地に近く、人が多すぎました。元々は移住先として指定されていた所だったからです。住民は生活にも事欠いていました。政府は何も支援してくれません。ある日、甥が以前住んでいた村にジャックフルーツを取りに行きました。3日たっても帰って来ないので、彼の弟が探しに行きました。しかし弟も帰ってきませんでした。4日後、村長にこのことを話し、友人2人を呼んで探しに行きました。すると、2人がジャックフルーツの木の下に埋められた地雷で死んでいるのを発見しました。地雷にやられた足は腐っていました。私たちはどうすることもできず、そのままにして戻ってきました。1993年5月のことです」⁹¹。

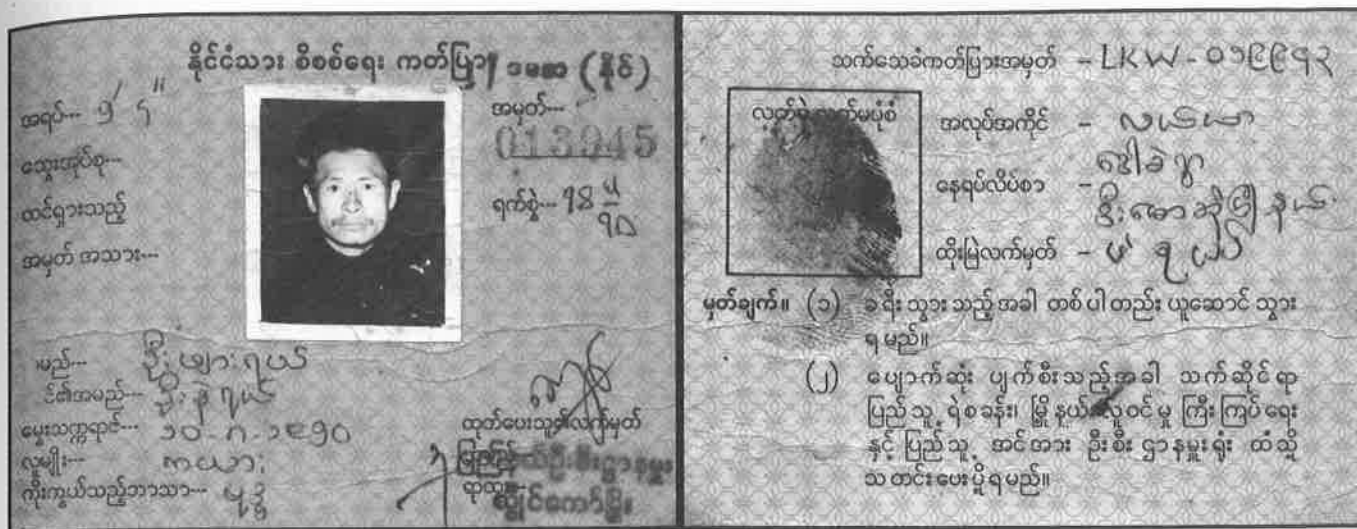
88 From the Land of Green Ghosts, Pascal Khoo Thwe, 2002, p.68.

89 KNPPの軍事情報, 1995年。

90 研究調査抜粋, Karenni Evergreen, 2001。

91 Images Asia と Karenni Evergreen による聞き取り調査 (No.44, 2001)。

軍政当局が地雷による死傷者に補償することは決してなく、治療が施されることもない。負傷した住民は、爆発させた地雷の代金として罰金を科される。家畜が地雷を踏むと、軍の食糧にするため没収され、家畜の持ち主は爆発させた地雷の代金を払わなければならない。2002～03年当時、地雷は1個1万5,000チャットだった（当時、ディーゼル油約11リットル分に相当）。



森で野菜を摘んでいる時に地雷を踏んで死亡した男性の身分証明書 提供：カレンニー・エヴァーグリーン

第6節 生態系破壊と生活基盤の消失

軍の拡大が引き起こす強制移住や人権侵害に加え、バルーチャウン水力発電事業は環境にも打撃を与え、カレンニーの人々の漁場に影響を及ぼした。このような変化は、自由に移動できず、畑も台無しにされたこととあいまって、カレンニーの人々が生計を立てることを不可能にしている。

第1項 バルーチャウン水力発電所建設による森林破壊と洪水

1960年代後半、当局は、水没予定地域に生えている木は大小問わず誰でも無料で切ってよいと宣言した。しかし実際には、当該の森林は人が足を踏み込めない状態だったことから、結局国家材木局（STB）が伐採することになった⁹²。

ダムが建設される前は、バルーチャウン川の流域は260平方キロメートルに及び、標高の比較的高い地域には常緑樹と熱帯季節林が密生していた。政府も住民も商用伐採を行っておらず、木が切られるのは住居建築その他の生活に必要なときに限られていた。バルーチャウン水力発電所建設が始まってから、モビエ盆地や高地の森林は住民や政府機関により全伐され、森林は激減した。森林破壊と山の斜面での焼畑農業は土壌侵食を引き起こし、ダム貯水池に土がたまると、水の保有量が減少した。バルーチャウン川に注ぐ複数の小川も最終的に干上がった。ビルマ軍政は2000年にインレー湖とモビエダムの保全計画に乗りだし、2000～2005年にかけて地元住民に1,500万本の木を植林させた⁹³。しかし貯水池の水の保有量は、建設されてからの40年間で目に見えて減少している。

ロピータ地域の住民は、発電所建設時にビルマ中央部から移り住んできた労働者についても不満をもらしている。建設終了後もロピータ付近に定住して商業規模で木炭の生産を始め、さらなる森林破壊を招いているからである。

「景色がすっかり変わりました。森がなくなり、バルーチャウン川も、森からバルーチャウン川に注いでいた多くの小川も干上がりました。それらの小川やバルーチャウン川、周りの環境は私たち住民の生活の一部でした・・・軍政は、私たちの環境や文化的・社会的遺産を劇的に変えてしまいました」⁹⁴。

⁹² Maung 1971, p.36.

⁹³ ペコン郡平和発展評議会命令（2000年2月）。

⁹⁴ Images Asia による聞き取り調査（No.4, September 2004）。

第2項 モビエダムによる漁業への影響

モビエダムよりも下流に住む住民はかつて、水路を塞いで、竹製の罟や網で魚をすくっていた。インタ、シャン、カヤー、カヤンなど、ダムの上流に住む民族住民は、エンジン付きの舟や様々な網を使って漁業を営んでいた。ダムができる前はタイワンドジョウ科の魚数種、ウナギ、コイ、ナギナタナマズの一種⁹⁵のほか、様々な種類のナマズが川のどこでも見られた。

ダムができから5年ほどたつと、魚の数と漁業に従事する人の数が減り始めた。クワロン村（ダムの上流、ペコンから約5キロ）の住民によれば、ダムができる前は村の全50世帯が漁業に従事していた。一人で一日あたり64キログラム分の魚が取れたが、今は村全体で2人の漁師しかおらず、一日あたり6.5～8キログラムの魚しか捕れない。住民は貯水池の悪臭と、病気の魚がいることに不満を漏らしている。

インドゴイとドジョウは見られなくなった。産卵に戻ってくる回遊魚ももういない。ナギナタナマズやトゲウナギなども滅多に見られなくなった。ウナギも種類を問わず見つけるのが難しくなった。くずを食べるととても小さい魚（ビルマ語でンガチーサーと言う）が出現し、増えている。水中の雑草が増えたため、水にかつてのような透度はない。水草は漁師の網を詰まらせてしまう。

モビエダム下流に住む住民⁹⁶は、バルーチャウン川の支流にある漁場で魚を取って生計を立てていた。ユニークな漁法を用いるのがインタ民族である。枯れ枝と枯れ葉を集め、湖や池に沈め、魚が集まる場所をこしらえる。しばらくしてから、竹の棒に網をつけたものを使って魚を捕る。捕れた魚は食卓にならび、一部はロイコーの市場で売られる。しかし現在、支流の一部は干上がり、魚数は減少し、この漁法も見られなくなった。

魚が減ったことに加え、駐留する兵士が増加したことで住民が自由に漁業を行うことも難しくなった。それまで人々は自由に川へ魚を捕りに行くことができた。しかし最近では、ビルマ軍兵士はポーン橋に軍キャンプを構え、住民に様々な脅迫を行い、色々な制限を課している。漁業で生計を立てている住民は食糧をどう確保するか途方に暮れている。地元の漁師は、次のように自身の経験を語った。

「魚が上流で産卵する時期のことですが、漁に出る途中でビルマ軍兵士に出くわし、働かされたことが3回あります。1回目は川の水位が上がった時期で、一番魚が捕れるテートコ村に着いた時でした。第72歩兵大隊に出くわし、森の案内役をさせられました。2回目は八番目の月（8月）で、還流魚が一番よく捕れる時期です。漁業に出かけ、13～14キロもするカメも取れ、大漁でした。第72歩兵大隊がやって来て、魚の一部とカメを、金も払わずに取り上げた上、行軍のための道案内をさせられました。その時は友人3人も一緒でした。3度目は、ちょうど魚を取り始めた時に、第102軽歩兵大隊の兵士に見つかり、ドーニェクへ帰る道を案内させられました。その際、兵士は私の円形の網も持って行きました」⁹⁷。

第3項 軍事活動が食糧採集と農業に与える影響

発電所が建設される前は、住民は自由に森に行き、食糧を採集することができた。しかし発電所ができからは、ビルマ軍は住民を指定した地域に住まわせ、移動を取り締まった。命令に従った住民もいたが、しばらくすると安全上の理由から、軍はまた別の場所への移住を命じた。ロピータ・ローダレイ間の道路沿いに、小さな農園やピーナッツ畑、乾田を作って細々と生計を立てる住民もいた。畑がない住民は、遠方に住む親族に助けを求めなければならなかった。自分の畑はすでに地雷原になっているからである。多くの人々は、少し離れた土地を耕すのにも、許可を得るため当局にお金を払わなければならなかった。結局多くの人々が生計をたてられなくなり、タイに逃げるのである。

第7節 暗闇に取り残される

「暗闇には慣れている」

95 （訳注）原文（英語版）では featherback fish。

96 ナウンチョー、パウンドー、パヤピュ、パヤニ村の住民。

97 カレンニー開発調査グループによる聞き取り調査（No.12, 2005）。

これはバラーチャウン発電所についての有名な歌の一部で、多くのカレンニーの人々の思いを代弁している。歴代のビルマ政権が発電所によりカレンニー州に「発展」と電気がもたらされると約束したが、どちらも実現していない。伝統的な水の利用法は禁止となり、農地は収奪され、不自然な洪水で作物は台無しになった。カレンニー州の3つの町にしか電気は届かず、それも少量で高額だ。

バラーチャウン発電所建設はカレンニー州のさらなる軍事化をも招いた。1961年に第2発電所が完成して以降州内に駐留する大隊の数は0から24に増加した。ロピータ地域に駐留する2大隊だけをとっても、少なくとも1万8,000個の地雷を埋設し、住民を強制的に移動させ、補償なしで土地を収奪した。また強制労働を課し、女性を強かんするとともに、抵抗した者や、たまたま運悪く通りかかった者を恣意的に殺害した。

カレンニーの人々は農地と生活手段を失い、地元にある資源を自由に使えなくなった。水利権は発電所のエンジニアと当局が独占しており、地元農民には何の配慮もない。貯水池が作られた場所では、森林が伐採され水没した。住民が食糧を採集していた森林は地雷原となり、危険で入ることもできなくなった。水位が変化し、魚に影響を及ぼした。

軍政による「開発」計画は、地元住民に利益をもたらさず得ない。軍事独裁の下では、住民参加や法の支配がまったく欠如しているからである。バラーチャウン水力発電所建設を通じた50年以上にわたる経験が、これを裏付けている。モジェダムや発電所付近の住民は、建設が始まった当時、何が起ころのか知らなかった。後になって、森林の破壊や生活に不可欠な水の喪失、破壊的な洪水がすべて、バラーチャウン水力発電所建設が原因だったことを知るのである。サルウィン川ダム開発を通じて同じことが繰り返されてはならない。

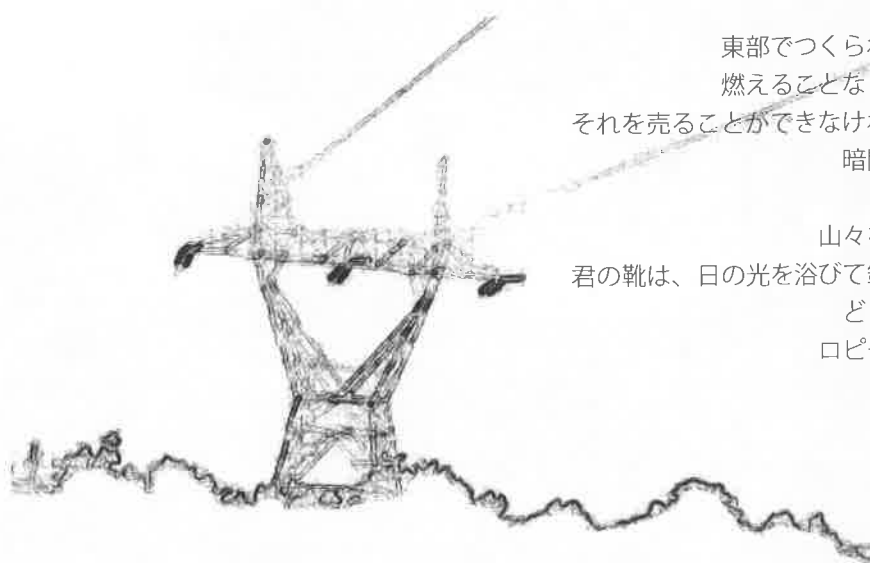
Box 4：バラーチャウン水力発電所の歌

山々を越え、森を抜け
君の靴は、日の光を浴びて銀色の光線を放つ
どこへ行くつもり？
シャンの地の息子よ 何という旅人

うちで少し休んでいきなさい
心からもてなすから
君は首を振って断り
休むことなく通り過ぎる

東部でつくられた品物がほしい
燃えることなく照る炎があるが
それを売ることができればしかたがない
暗闇には慣れている

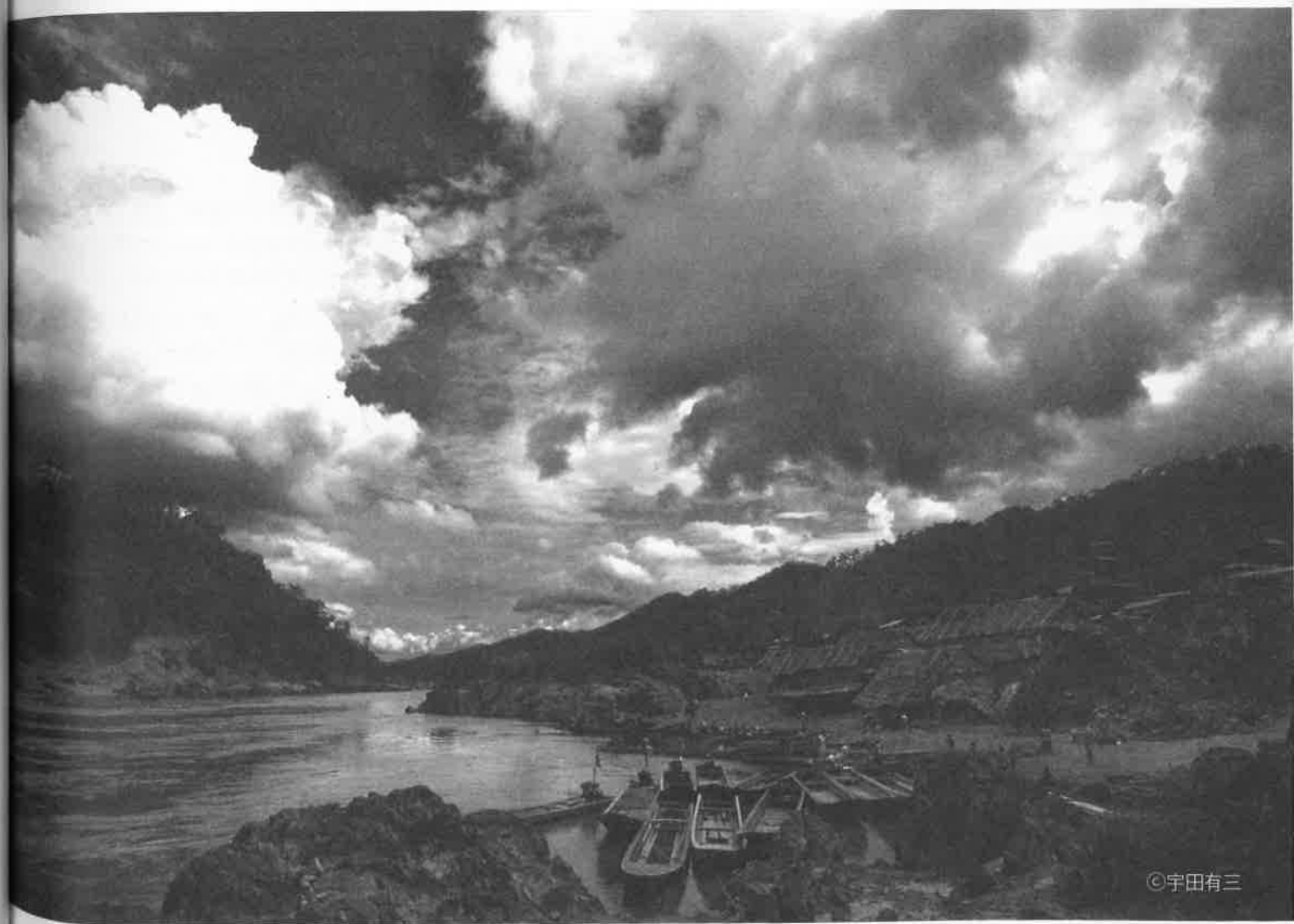
山々を越え、森を抜け
君の靴は、日の光を浴びて銀色の光線を放つ
どこへ巡礼へ行く？
ロピータ おお旅人よ



これはバラーチャウン水力発電所についての有名な歌（ビルマ語）で、1975年頃サイカムレイによって作曲された。「靴」は鉄塔を、「銀色の光線」は送電線を表す。送電線は、「休むことなく通り過ぎ」「うちで休んでいく」こともない。つまり、ビルマ中央部に直接電気を送り、地元には電気をもたらさない。

第3章

サルウィン川ダム建設事業



1956

1956年1月1日

サルウィン川ダム建設事業

第1節 サルウィン川ダム建設事業とは

「サルウィン川は、私たちを追う者にとって大きな障壁であると同時に、私たちを安全に導く経路でもあるという、二重の象徴となった。サルウィン川は私たちの心の中で、先祖にとって常にそうであったように、崇め有めるべき精霊、いや神のような存在に戻っていった⁹⁸」。

軍事政権は、隣国タイと中国の支援のもと、水力をさらに開発するためサルウィン川に注目するようになった。外貨を獲得し国境地域を支配するため、軍政はダムを建設してタイに電力を売る計画を推し進めている。サルウィン川でのダム建設を進める前に、バルーチャウン水力発電所建設を通してカレンニーの人々が得た苦い教訓を十分に考慮するべきである。住民への空約束、強制移住、人権侵害といったバルーチャウン水力発電所建設時とよく似たパターンがサルウィン川流域でもすでに見られるからだ。

サルウィン川はチベット高原に発し長さ約 2,400 キロメートルで、中国の雲南省、ビルマのシャン州・カレンニー州・カレン州を流れ、モン州からマルタバン湾に注ぐ。ダムのない川としては東南アジアでもっとも長く、流域には豊かな生物多様性が見られる。

サルウィン川は流域住民の日常生活にとって重要であることから(第1章3節「背景」を参照)、文化的重要性も高い。カレンニーの人々の中には、サルウィンの水を飲めば病気が治ると信じる人もいる。年に一度行われるケトボ祭の期間中、年長者は若者に「ブラートウーボーファーチャイケイ(サルウィン川が長いように、お前が大きくなるように)」と言って祝福する。このような言い伝えは多くの村に残っている。

サルウィン川が軍事戦略的にも重要な川であることも明らかだ。攻撃してくるビルマ軍にとっては天然の障壁である。カレンニーの人々は戦闘中でもサルウィン川まで来れば安全を確保することができる。サルウィン川ダム建設により、ビルマ軍がこの地域に侵攻することになれば、軍政はこの戦略的係争地域での支配を広げることになる。

第2節 ダム建設計画

サルウィン川が中国国内を流れる部分(「怒江」と呼ばれる)には、13のダムを建てる計画がある。これに加え、ビルマ軍政とタイ政府もサルウィン川に複数のダムを建てるため、過去数年の間に何度も協議を行い、複数の合意に調印した。タイ発電公社(EGAT)は2005年12月9日に軍政と覚書に調印し、サルウィン川の4か所とテナセリウム川の1か所にダムを建設することで合意した。サ

98 From the Land of Green Ghosts, Pascal Khoo Thwe, 2002, p.195.

ルウィン川の4か所はタサン、ウェイジー、ハッジーとダグウィン⁹⁹。タサンはシャン州に、その他3か所はカレン州にある。12月の覚書には、特にハッジーでの建設を進めることが記されている。

4つのダムは合計1万5,000～2万メガワットの定格出力をもつことになる。これは現在のビルマの総電力使用量の10倍以上に相当する。とはいえ、サルウィン川ダムが生産する電力のほとんどはタイへ輸出される予定だ。タイは2015年までに定格出力を4万メガワットまで引き上げようと計画している¹⁰⁰。2005年12月の覚書調印後、タイ発電公社のカナスタ総裁は、サルウィン川ダム計画はタイに安価な電力を、ビルマには必要な収入をもたらす「両国に利益をもたらす事業」とし、またサルウィン川ダムからの電力はASEAN電力網に組み込まれるとも述べた¹⁰¹。カナスタ氏も、氏と同じく「両国にとって利益となる事業¹⁰²」だと賞賛したタイのエネルギー大臣、ウィセート・チューピバーン氏も、非情な軍政に対して彼らが「渴望する収入」をもたらすことには何のためらいもないようだ。

タイや中国をはじめとした複数の政府、金融機関（アジア開発銀行による間接的な支援を含む¹⁰³）と、タイ電力公社、タイの大手建設企業MDX、中国水利水電建設集团公司（シノハイドロ）などの企業がサルウィン川ダム開発に関わろうと準備している。上記の諸機関を含め、事業にこれから参入する実体はすべて、ビルマ軍事政権と協働することになる。つまり、事業展開中に軍政が行う人権侵害や犯罪の共犯者になるのだ。

タイ当局は、ダム建設や予想される影響についての重要な情報を公表せず、意志決定過程でも地元住民との協議や参加を認めなかった。これはタイの1997年憲法58、59、60条と、1997年のタイ情報公開法の規定に反している。タイの市民団体は政府に対してもっと情報を公開するよう要請している。上流の中国では2003年、学者や環境団体が中国政府に対し怒江でのダム建設を再考するよう要請し、政府は合意した。しかしビルマ側の住民にはロビー活動など不可能だ。

サルウィン川については様々な視点からいくつもの報告書や記事が書かれている。中国は怒江でのダム建設計画について、シャンの人々はタサンドムについて、カレンの人々はウェイジー、ダグウィン地点周辺の軍事化について、タイ人はタイ側での影響について報告している¹⁰⁴。これらの報告書はどれも、ダム建設が及ぼす影響の大きさを理解する上で重要である。本報告書ではウェイジーダムに焦点を絞る。サルウィン川ダムのうちウェイジーダムはカレンニー州に居住する人々、同州を出身とする人々にもっとも大きな影響を及ぼすからだ。しかし、ウェイジー以外のダムが建設されたとしても、以下に述べる影響が出ないというわけではない。

ここで強調したいのは、多数のメディアがサルウィン川ダム事業に関心を示し、多くの記事が書かれているものの、建設の影響をもっとも被る地元住民、特にシャン、カレン、カレンニーの住民やサルウィン川沿いに隠れて生活する国内避難民は建設計画について何の情報も与えられず、サルウィン川ダム建設によって受ける影響について協議する場に招かれることもないという事実である。

第1項 ウェイジーダム

ウェイジーダムは、タイのメーホンソーン県メーサリアン郡からサルウィン川を挟んだビルマ側、カレン州パブン郡にある、大きな渦巻（ビルマ語で「ウェイジー」）のできる地点に建設予定である。高さは168メートル、最大水位は海拔220メートルで、推定定格出力は4,540～5,600メガワットだ¹⁰⁵。ウェイジーダムが建てられる所はカレン州だが、ダムの貯水池の大半はカレンニー州内になる（地図9「ウェイジーダム建設による推定水没地域」を参照）。ウェイジーダムはモビエダムの少なくとも10倍の高さで、カレンニー州でもっとも豊かな低地森林と農地の多くを水に沈める。

99 カレンニー州ユワティにもダム建設が検討されている。

100 http://www.aseanenergy.org/energy_sector/electricity/myanmar/installed_capacity.htm

101 *Green group pans Salween dam plan*, The Nation, published on Dec 10, 2005.

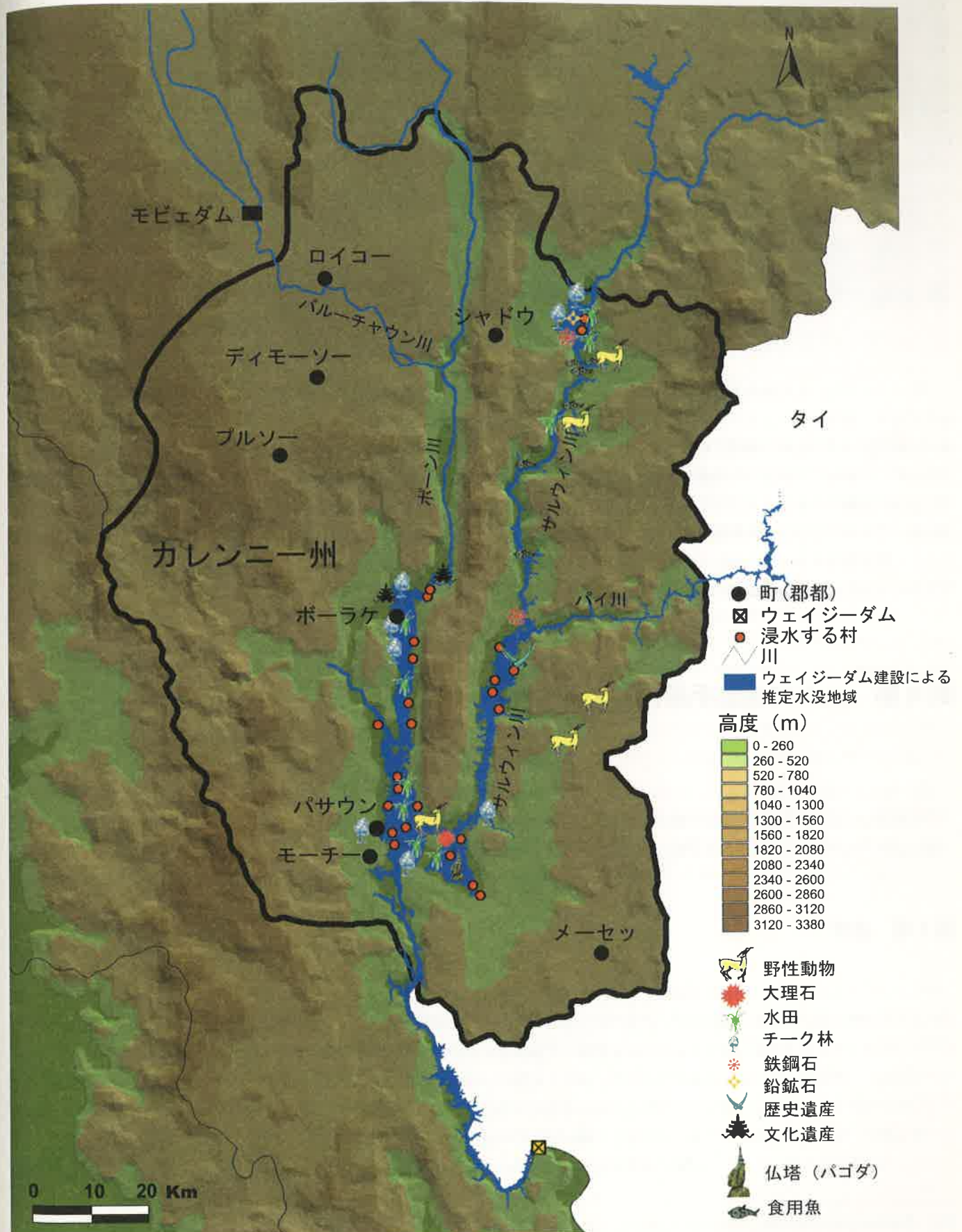
102 *Government to push Egat to invest in Burma dams project*, Bangkok Post website "Breaking News", November 14, 2005.

103 アジア開発銀行（ADB）によるビルマへの関与のうち重大なのは、大メコン河地域（GMS）経済協力計画を通したものだ。また、シャン州でのタサンドム建設計画はADBのRegional Indicative Master Plan on Power Interconnection in the GMSに組み込まれている。詳しい情報は<http://www.adb.org>を参照。

104 例えば、次の資料を参照。*Damming at Gunpoint, Burma Army Atrocities Pave the Way for Salween Dams in Karen State*, Karen Rivers Watch, 2004, *Tragedy of the Two Lands*, Southeast Asia Rivers Network, 2002, *Nujiang River Sentiment*, 2004, www.nujiang.ngo.cn, and *The Salween under Threat: Damming the Longest Free River in Southeast Asia*, Salween Watch, Southeast Asia Rivers Network, and Center for Social Development Studies, 2004.

105 *Water and Dam Construction*に引用されているように、1991年に電源開発株式会社（EPDC、当時）が行った予備調査によるとダムの高さは168メートルである。タイ発電公社（EGAT）の文書にもダムの高さは168メートルで、最大水位220メートルと書かれていることが確認されている。しかし、出力に関しては報告書や記事によって数値が異なる。

地図9: ウェイジーダム建設による推定水没地域



カレン州パブン郡は長年、ビルマ軍の攻撃や反政府ゲリラに対する作戦の舞台となってきた。1992年までは、同郡にビルマ軍の駐屯地は10か所しかなかった。今日では重砲を備えた54の駐屯地があり、そのうち12はサルウィン川沿いにある。ウェイジーダム、ダグウィンダム予定地の周辺にはもともと85の村があったが、現在はその4分の1しか残っていない。住民のほとんどは豊かな土地を捨ててタイに逃亡した。しかし住民5,000人がジャングルに隠れており、厳しい食糧難と健康問題に直面している。ダム建設予定地へ続く道路は強制労働によって建設され、道路沿いには地雷が埋設されている¹⁰⁶。

カレンニー開発調査グループは、ウェイジーダムによって640平方キロメートルの表面積を持つ貯水池ができると推計している¹⁰⁷。シンガポールと同じ面積だ。上流のシャン州のタサダム建設予定地は海拔200メートルなので、調査書などにある通りウェイジーの最大水位が海拔220メートルなら、タサダムも水面下になってしまうことになる。水位が海拔220メートルなら、水没面積は640平方キロメートルではなく860平方キロメートルになる。どちらの計算にも、貯水池周辺での整地の必要や水位の上昇、雨季の増水量は加味されていない。したがって、影響を受ける地域は地図9「ウェイジーダム建設による推定水没地域」にあるものより広くなるとみられる。

第3節 ウェイジーダム建設が人々の生活にもたらす影響

ウェイジーダムによる水没予想地域は、カレンニー州の7郡のうち4郡に影響を与え、パサウンとボーラケの町全体を含む28村を冠水させる（地図9「ウェイジーダム建設による推定水没地域」を参照）。水没地域にはもっと多くの村があったが、長年にわたる内戦のため住民はすでに別の場所に移動させられている。とはいえ、カレンニー開発調査グループとカレンニー社会福祉発展センター（KSWDC）の調査によると、洪水被害を直接受ける住民数は、控えめに見積もっても現時点で8,300人に上る。また洪水地域に隠れている国内避難民は推定1万3,500人である。ディモソー郡やユワティ付近に移住させられたか隠れており、水没予定地域内の水田に頼って生活している国内避難民は約3,700人いる。水没予定地域の出身で、元の村に帰れない難民や移民は約8,400人いる。カレンニー開発調査グループの推計では、貯水池の出現によって3万3,951人が影響を受ける。内訳は水没する村落の住民、洪水地域で生活する国内避難民、故郷に帰れなくなる難民と移民である。

第4節 人々の生活手段に与える影響

「高い山々から溪谷を通りサルウィン川に注ぐ小川や、湧水、川の流域は、野生動物が棲息するのに適しており、ほとんどの地域が狩り場として良い。農業にも適した豊かな地域で、地元住民は川沿いに菜園をつくり、マメ、タバコ、スイカを育てる。川沿いの土壌は雨季の増水時にもたらされる栄養分が肥えており、作物がよく育つ」¹⁰⁸。

第1項 農業

サルウィン川はカレンニー州東部を縦断する溪谷をつくり、そこに住む大多数の人に豊かな低地農場を提供してきた。ここでは陸稲ではなく生産性の高い水稻が主要作物で、ごま、トウモロコシ、ピーナッツ、エンドウ、唐辛子が自宅消費用および販売用に栽培されている。住民の大半が雨季に出現する小川の水を利用して農業をするので、季節作物は種類しか栽培できない。しかし乾季にはサルウィン川沿いの肥沃な土地に広く菜園がつくられ、様々な果物が一年を通して収穫可能である。特にカレンニー州ボーラケ郡には、よく育った天然のマンゴー、ココナッツとプラムの木が豊富にあり、住民がココナッツジュースやプラムジュースを他郡に売っている。メーセツ郡は、他の地域と比較して米とゴマがよく穫れることで知られる。

カレンニー州は山がちのため、一般的に水田や低地農業に向いている地域はほとんどなく、それもほとんどが水没することになる。

106 Damming at Gunpoint, Karen Rivers Watch, 2004, pp.1-2.

107 最大水位を海拔200メートルとした場合（第1章2節「方法論」を参照）。

108 KDRG Trading along Salween River Interview No.7, June 6, 2005.

パルーチャウン発電所建設の例をみると、被害に対する補償はまず支払われないだろうし、住民が新しい農地を見つけることができるのか、できるとすればどこにあるのかも明らかではない。

第2項 漁業

洪水被害を受ける4郡とディモソー郡ドータマウジー村落区の住民は、タンパク質の摂取を川で捕れる魚に頼っており、魚を売って収入の足しにしている人もいる。ポーン川沿いの住民もほぼ全員が魚を獲る。農業だけでは食糧が足りないからだ。

地元住民は様々な方法で魚を捕獲

し、捕った魚を様々な方法で利用する。近代的な器具はないので、主な漁業用具は釣り針と釣り糸、円形ないしは円錐形の網だ。人々は山と川の精霊（ナツ）が祀られた祭壇にろうそくと食べ物と飲み物を供え、豊漁を祈る。苗を植えるときに魚の切り身を一緒に土に埋める人も多い。植えたものがたくましく育ち、より実が多く穫れると信じているのだ。捕った魚は周辺の村やロイコー、ディモソー、プルソーなどの町で売ったり、乾燥させて自宅の食用とする。稼いだお金は貯蓄し、衣服や子どもの学費や緊急時の資金とする。また捕った魚を物々交換する場合もある。

ポーン川には、ナマズ、数種類のウナギ、ナギナタナマズなどのナマズ、コイ、インドコイやタイワンドジョウ科の一種¹⁰⁹など、価値のある様々な種類の魚がいる。これらの魚はポーン川で産卵するためにサルウィン川から上ってくる。情勢が不安定なため、カレンニー州内のサルウィン川とポーン川では、棲息する魚の種類についての調査はほとんど行われていない。しかしタイ側に住むカレン民族の住民が行った最近の調査では、サルウィン川本流とメーホンソーン県を流れる複数の支流に70種類の魚がいることが確認されている¹¹⁰。また、サルウィン川のタイ・ビルマ国境を流れる部分だけでも、瀬のほか、異なる種類の棲息地や砂地の岸边など18の異なる生態系があることも確認された。カレンニー州内のポーン川沿いの住民も、ポーン川にも同じような生物多様性があると話す。ボーラケ周辺のポーン川には、洞窟と魚の特殊な棲息地が数百もある。この地域も水没する予定で、洞窟も水に隠れ、棲息環境が破壊されることになる。

雨季には多くの魚が産卵のためサルウィン川から支流や小川に遡上する。これらの支流はカエルにとっても重要である。地元住民によれば、モビエダムが建設された後にパルーチャウン川沿いの多くの支流や小川は干上がり、堆積した土砂で埋もれてしまった。ウェイジーダムが建設されて同じことが起きれば、回遊魚が雨季に産卵する場所がなくなり、絶滅の危機に瀕する種もあるかもしれない。

第3項 森林での狩猟採集の生活

カレンニーの人々の生活にとって森林は非常に重要だ。森林には燃料や、住居の建築資材が豊富であり、人間や動物の食糧となる数え切れない種類の野生の果物、野菜、キノコ、季節物の食物があり、低地農場の肥料となるバイオマス、売って収入源となる非木材林産物、動物、薬草のほかたくさんのものがある。シャドウ郡ではほとんどの村の住民が移住させられてしまったが、郡の住民は以前は、藤製品、樹脂製品、蜂蜜、蠟、スティックラック（ラックカイガラ虫の分泌物が付着した樹木の小枝で、塗料などに使用される）、タナカ（天然の日焼け止め）だけではなく、滋養強壮やマラリアの治療に使われる薬草の売買をしていた¹¹¹。森林は住民の生活や生計と切り離せないものだが、広大な森林が貯水池によって水没し破壊されるだろう（以下を参照）。



パサウン郡での水田耕作 提供：カレンニー社会福祉発展センター

109 (訳注) 原文(英語版)では snakehead.

110 Thai Baan Research at the Salween: Villagers' Research by the Thai-Karen Communities, 2005, www.searin.org.

111 BERG 2000, p.3

表3：ウェイジードム建設に伴う人的影響（推定）¹¹²

水没する村落の世帯数・人数			
村落名	郡	世帯数	人数
ケマピュー	パサウン	120	600
ナンマフー	パサウン	20	96
ナンマク	パサウン	80	385
パサウン	パサウン	250	1,280
ナンキ	パサウン	40	200
パプ	パサウン	17	80
トゥーチャウンタダー	パサウン	20	110
チャウペニョ	メーセツ	25	130
ソパ	メーセツ	110	520
フェパプ	メーセツ	50	245
パマク	メーセツ	20	115
ナンピンリン	メーセツ	30	142
ワンアウー	ボーラケ	50	160
チックウエ	ボーラケ	25	115
ワンチャイ	ボーラケ	35	217
イエニバウ	ボーラケ	50	250
モンタン	ボーラケ	35	185
ボーラケ	ボーラケ	400	2,430
ホーカン	ボーラケ	25	150
ソーロン	ボーラケ	25	150
スポ	ボーラケ	15	63
ワンパラ（下流）	ボーラケ	13	75
ワンパラ（上流）	ボーラケ	15	82
サヤ（タヤ）	ボーラケ	20	120
ホタ	ボーラケ	20	89
サラウン	シャドウ	39	187
パロン	シャドウ	15	75
ナーチャイン	シャドウ	13	76
水没する村落の世帯数・人数の合計		1,577	8,327
影響を受ける国内避難民		該当データなし	13,526
水没地域にある畑に頼って生活している人		該当データなし	3,698
影響を受ける難民		該当データなし	4,400
影響を受ける移民		該当データなし	4,000
合計			33,951

112 （訳注）原文（英語版）の一部に計算の誤りがあったため合計を修正した。

Box 5：漁場の破壊

サルウィン川とポーン川は流れが速く、季節によって水位も上下する。ここが貯水池に変われば、魚の回遊と産卵、そして最終的には棲息数と種の多様性に悪影響が出ることになる。

季節ごとの水の流れが大きく変わり、川の化学的成分が急激に変化し、天然栄養分の循環が破壊され、魚の回遊が妨害され、魚が産卵地やえさ場に入れなくなることは、川やそこに住む生物がダム建設によって受ける深刻な被害のほんの一部に過ぎない。季節による流れの変化や、瀬や淵のある環境に適応した川の生物の多くは、ダムによる貯水池のような水の動かない環境に適応することはできない¹¹³。



カレンニー男性の多くは、米の収穫期に食べる肉を確保するため収穫前に一週間の狩りに出る。通常は5人ほどずつに分かれてボートで川を下り、支流を遡る。日中は網で魚をとり、夜にはカエルや野生動物を狩る。大型野生動物のうち、よく獲れるのは野生のブタやシカだ。獲物には保存処置を施す。魚はペースト状にしてから干し、肉類も干したり塩づけにしたりする。こういったものはすべて竹筒に入れ平等に分ける。カエルは生きたままカゴに入れ、残った肉と同じく売り物にする。一年のうちこの時期以外は住民の大半は畑仕事で手一杯で、水田の近くで小動物を狩るくらいだ。

第4項 河川交易

カレンニー州には、モーター付きボートで航行できる川が4本ある。サルウィン川、ポーン川、バルーチャウン川そしてパイ川だ。交易にはサルウィン川が主に利用される。サルウィン川が流れる三つの国（中国、タイ、ビルマ）の人々は古くから木製の船と丸太のイカダを用いて互いに貿易をしてきた。とりわけ中国雲南省の人々、シャン、ワ、アカ、ラフ、カレンニー、カレン、タイ側に住むカレン（タイ・カレン）、モンといった人々は、今日まで川を利用して昔ながらの交易や商業を営んできた。交易のほとんどは小規模で、周辺の農家が農産物を売る手段となっている。道路がないので、物資を運ぶには川が重要となる。

パサウンの町は、カレンニーの人々の交通の重要な中継点であり交易の中心地である。パサウンはメーセツ経由でタイ、ビルマ中部トウンゲーの平原、陸路でロイコーを經由し、シャン州、サルウィン川を伝ってカレン州とシャン州、そしてパイ川を伝ってタイへ通じる重要な地点である。もう一つの重要な経済の中心地であるボーラケの町と同様、パサウンの町全体が貯水池によって水没する。

ウェイジーダム建設予定地に近いメーサムレップは、タイのメーホンソーン県メーサリアン郡にある交易の中心地だ。ビルマ産の牛やヤギ、タマネギ、豆、ゴマ、乾燥させた唐辛子などの乾物、タイ産の調理油、調味料、家財道具、衣服、医薬品などの消費財が取引



ボーラケ付近にある僧院。これも水没することになる。
提供：カレンニー民族進歩党

¹¹³ Food for the people: Natural fishing of the Mekong River, Dave Hubbel in Watershed, People's Forum on Ecology, Vol.4 No.3, June 1999, p.34.

される。ウェイジーダムが建つとメーサムレップからサルウィン川を通してカレンニー州に行くことができなくなり、古くからの交易ルートが断たれる。川上のカレン・カレンニー州の州境にあるタコータという村も交易地で、地元住民が手作りの蝋燭を売買しているが、ここも水没する。

サルウィン川の渓谷沿岸はゴマや唐辛子の大半が販売目的で生産される地域だが、ここも水没する。現在の地域経済の構造が解体されることで、地元の製品の行方は不透明になる。カレンニー州とタイを結ぶ新たな交易ルートが生まれることは確かだが、それまで小規模耕作者や農家、商人は生活手段を失うことになる。

第5節 ウェイジーダムがもたらす社会的・文化的影響

第1項 社会福祉サービスへのアクセスと健康に与える影響

ボーラケとパサウンは、農村部がほとんどを占めるカレンニー州では比較的大きな町である。周辺地域の住民は、生活上重要なサービスや市場についてはボーラケとパサウンに頼っている。例えば、メーセツ郡の住民は地元には高校も病院もないのでパサウンに行かなければならない。しかしウェイジーダムによってパサウンの町とメーセツ郡からパサウンに通じる唯一の道路が水没する。パサウン郡の住民は言うまでもなく、メーセツ郡の住民は医療と教育を受けるためのただでさえ乏しいアクセスを失うことになる。学校や診療所も破壊されるが、現在のダム建設計画にはこれにとって代わる新しいインフラ整備への言及はない。

ビルマの保健制度は劣悪だ（世界保健機関はビルマの保健制度を世界でワースト2位だとした。ワースト1位のシエラレオネと大きな差はなかった）が、サルウィン川ダム建設によって住民の健康にも悪影響が生じて、保健制度にさらに負担がかかり、国境を越えたタイにまで悪影響が及ぶだろう。ジョーンズホプキンス大学ブルームバーグ公衆衛生学校のウィタヤ・フアノック博士は、次のように述べる。



カレンニー・モバイル・メディカルチームがシャドウ郡で女性を治療 提供：カレンニー・モバイル・メディカルチーム

「マラリアがある地域では、ダム建設による水の流れの変化によって媒介生物が入れ変わり、例えばより能力の高い蚊が媒介生物として主流になるケースが多い。このことが蚊の移動と相まってマラリアの感染や、マラリアの種の変化（例えば三日熱マラリアからより致死率の高い熱帯熱マラリアへの移行）を引き起こした。同様に、ダム建設とそれに伴う洪水により、バンクロフト糸状虫感染（リンパ管フィラリア症（象皮病を起こす寄生虫））が増えたケースもある。これも主に、その環境に適した蚊が好む条件が整ったことに起因する」¹¹⁴。

ウィタヤ博士は次のように結論づける。「ある事業が環境を大きく変えたり、人口動勢の変化を起こす可能性がある場合は必ず、病気の予防対策を検討するべきだ。感染症を予防するコストは、いったん蔓延してしまってから抑制するコストよりもはるかに低い。このような潜在的な問題について詳しく調査して得られるものは、事業そのものによる利益よりも大きいかもしれない」¹¹⁵。

第2項 歴史的・文化的遺跡

歴史的な都であるボーラケの町や、パイ川にある白い象の洞窟（ビルマ語名はチョウモウコン、カレンニー語名はロカデャレー¹¹⁶）、第2次世界大戦末期に敗れた日本軍が使った撤退ルートなど、カレンニーの重要な文化的・歴史的遺跡が水没する。

ソーロン

ボーラケは1750年から英領期まで5代に渡って領主が統治していた。パバンの在位中（1800年頃）、才能のあるパポーという男性がボーラケの東側に新しい領地を築くようパバンに命を受けた。パポーはソーロン村に二つの王宮（ホー）を建立した。シャンの人々はサオロン村のことを「偉大なる領主の住む黄金の館」（サオロンハウカム）と呼ぶ。パポーの息子は1886年父から位を継承し、ビルマ王と同盟して英国に抵抗した。1889年、英国勢力がこの地域を支配下に入れ、王宮は破壊された。しかし今日も王宮の面影を残すものや、ビルマのミンドン王から贈られた重さ752キログラムの銅製の鐘、多くの仏舎利塔がある。歴史的な古都であるサオロンはカレンニーの人々の民族自決への願いをよく象徴しており、この遺跡が水没して消えてしまうことには特に大きな懸念がある¹¹⁷。

歴史的なカレンニー・タイ友好協定調印の場



ボーラケの王宮（ホー）も水没する 提供：カレンニー民族進歩党

サルウィン川沿いにあるサヤ村は、1809年にカレンニー東部の王とチェンマイ王が歴史的な友好協定を結んだ場所である。カレンニーの習慣に従って宣誓式が行われた。その儀式では、水牛を殺し、その血を酒と混ぜて「真実の酒」をつくる。水牛の角は双方の王に一本ずつ渡された。それから王たちは次のような誓いを立てた。「サルウィン川の水が干上がり、水牛の角がまっすぐになり、そして白象の洞窟が沈むまで、ムアンデーン（カレンニー）とチェンマイは、友好関係を維持しましょう」¹¹⁸。

114 Dams, Diseases, and Displacement: The Potential Public Health Costs of the Salween Dams, Withaya Huanok, MPH, MD, 2006.

115 Ibid.

116 カレンニー開発調査グループによる聞き取り調査（No.14, 2005）。

117 Kayan Tribe History, Pe Maung Soe, 2001, pp.233-35.

118 Independence and Self-determination of the Karenni State, KNPP Political Bureau, 1997.

Box 6：絶滅の危機に瀕する民族、インタレー

インタレー民族はかつてボーラケのパバン王に仕えていた。今日は推定 1,000 人しかいない¹¹⁹。インタレーの祖先の地はパサウン郡とボーラケ郡にあるため、ウェイジーダムが建設されればインタレーの神聖な土地、文化的遺産、生活手段、住居と森林が水没してしまうことになる。サルウィンダムによって、民族としてはインタレーが他の民族に比べてもっとも大きな被害を受けることになる。

信仰と習慣

インタレーはカヤー民族のサブグループで、言語はカヤーとわずかに異なるが、文字を持たない¹²⁰。多くは仏教徒で、同時に精霊信仰もある。インタレーの住居には必ず仏壇と精霊を祀る祭壇がある。精霊の祭壇は円形で、木か竹の長い棒を支柱とし、屋根にはひさしがある。インタレーはピトゥルモという名の精霊に特別の敬意を払っている。毎年イル祭の時期にはケトボという支柱に止まるようピトゥルモ精霊に呼びかける。

インタレーは多くの精霊を信仰しており、ニワトリの足の骨に空いている穴の様子や位置を見て、関連する精霊に供物を捧げる。鶏骨占いは、精霊に敬意を表したり、将来を予測したり、誰かが病気になったときなどに行われる。

またインタレーは山や、ジャングル、大きな木に守護精霊が宿ると信じている。これらの精霊は強い力を持つとされるので、畑を耕す際には、豊饒そして不作がないように供物を捧げお参りをする。

母親が亡くなると、亡くなった母親から子どもを離すため、子どもの背丈の糸を子どもの身代わりとして棺桶の中に入れる。また、幼い子どもが夜外にでる際には煤を額に塗るか、幼児の足か手、首に 25 ピヤ玉か 50 ピヤ玉をつるした糸を巻きつける¹²¹。これで子どもが邪悪なものから守られ、健康で長生きできると信じられている。昔の有力者は硬貨や剣、槍、火打ち石銃などの持ち物を一緒に埋葬させた。墓では頭の脇の盛り土の上に小さな囲いを作り、水牛、牛、ブタ、ニワトリなどの家畜の足を入れた。それらの動物の肉は埋葬準備を手伝った者にふるまわれ、埋葬の前に食べた。重要な伝統的な祭りはもち米祭り（プエソウドウン）で、悪い精霊を居住地から追い出したことを祝うものだ。祝宴は三日間続き、人々は歌い踊る。

インタレーの人々は、伝統的習慣を厳しく守らなければ大きな災いが起こると固く信じている¹²²。

伝統衣装¹²³

男性の伝統衣装は、ゆったりした白色の半袖シャツと、白色でゆったりした膝の上までのズボンである。長い髪を結って白色もしくはピンクのターバン状の布を頭に巻き、布の端は頭の右側で上向きに立てる。金か銀でできた耳飾りをつける。

女性は赤のふち取りをした、前をボタンで留める半袖の上着を着る。サロン（巻きスカート）は赤茶色の生地に黄色と緑の縞模様がある。髪を結って布を巻き、布に銀または象牙でできたヘアピンを飾る。

タブー

イル祭の期間中は伝統衣装を身につけなければならない。雷魚やトカゲ類を食べてはならない。妊娠した女性の枕カバーは口を縫いつけてはならない。男性はテイヤ（米でつくるワイン）を醸造するために特別に取っておいたトウモロコシの種をまき、揚げ物を食べてはならない。揚げ物を食べると種が育たないとされているからである。この決まり事はトウモロコシの種をまく間にだけ守られる¹²⁴。

生計

インタレーは主に農業、牧畜、狩猟によって生計を立ててきた。手芸品をつくることもある。岩石に囲まれた地域に居住し、土地はやせているので最低限の耕作しかできない。灌漑もできないため畑の水は雨に頼り、移動耕作を行う。住民が協力して巨木をくり抜き住民全員が使える大きなボートをつくる。乾地農場の産物を売って収入を補い生計を立てている。



119 以前は、インタラインもしくはヤンタラインとしても知られていた。

120 *Myanmar Ethnic People Traditions and Culture (Kayah)*, a publication of the BSPP, 1967.

121 （訳注）100 ピヤが 1 チャット。

122 注 120 を参照。

123 （訳注）写真の衣装は、最近つくられたインタレーの衣装であるため、本文中の記述と一致しないところがある。

124 （訳注）インタレーが居住する地域でのトウモロコシの種まきは 5 月頃。

第6節 ウェイジーダム建設が環境に与える影響

カレンニー州を流れるサルウィン川沿いの森林について包括的な調査が行われたことはない。しかし、水没地域にある野生動物や鳥の棲息地を含む森林が完全に破壊されてしまうことは確かである。第1章3節「背景」で述べたように、貯水池となるのはすべて生物多様性が非常に豊かな地域だ。アジア開発銀行（ADB）と国連環境計画（UNEP）は『大メコン河地域の環境アトラス』の中で、「この地域の調査が進めばさらなる生物多様性が発見されるだろう」と述べる。しかしいったん水没してしまえば、調査が行われ実態が明らかになることはない。

数百平方キロメートルの森林を破壊するという主な被害に加えて、水没地域の外にある森林への二次被害も起きるだろう。水没地域の森林や土地に頼って生計を立てている推定2万5,500人の住民が土地を追われ、残った森林に侵入していくことが考えられる。低地では狭い土地でも多くの人の生活を支えられるが、高地（貯水池完成後も移住可能な場所として残る地域）では事情が異なる。したがって、同じ人数が生きていくためには今よりも耕作地を広げる必要があり、これまで手つかずだった森林に入っていくしかない。歴史が示しているように、人々は安全を求めさらに森の深くへと入り、従来の生態系のバランスをかき乱すことにもなるだろう。

ダム建設用の道路整備、従来の交易ルートや水没予定の道に代わる道路を建設する際にも森林が伐採されるだろう。新しい道路は、かつてアクセスできなかった地域での伐採を可能にし、促進することになる。カレンニー州にあるような成熟したチーク林は世界に他にあまり残っていない。

パサウンの町からサルウィン川を挟んで対岸にある平野は特に、さまざまな種類の動物の獵場である。乾季にはホエジカ、野生の牛、野生の水牛、鹿、熊、野生のブタなど様々な野生動物が山から降りてきて水や食べ物を探す。ここも水没する。

貯水池によってシャドウ郡のエメラルド、アンチモン¹²⁵、鉛鉱石とアルミニウムの埋蔵地も水没する。メーセツ郡ソパ村のすぐ下流では大理石が採れる。ポーラケ郡ユワティ（タイ発電公社の書類にダム建設候補地として言及があり、ミャンマー電力公社もここでの水力開発を推進している）付近では鉄鉱石が採れる。

Box 7：ダムが生態に与える影響

パトリック・マッカリーは著書『沈黙の川——ダムと人権・環境問題』で、ダムが環境に及ぼす影響を次のように述べる。

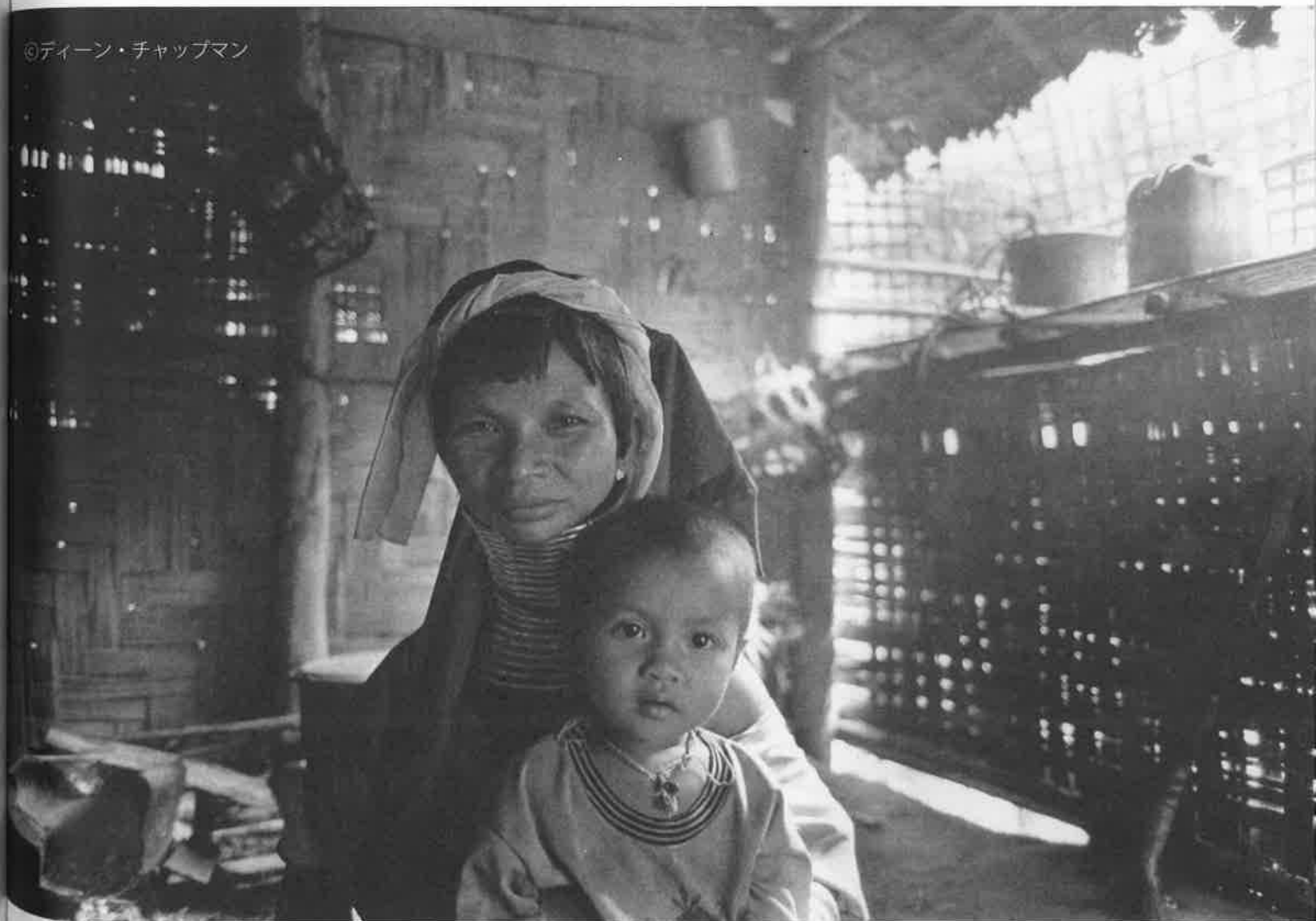
「森林、湿地、野生動物の生態が永久に水没してしまうことが、おそらくダムによるもっとも明らかな環境への影響だろう。（中略）しかし失われた土地の面積だけでなく、その土地の質も重要だ。河川と氾濫原の環境は世界でもっとも多様な生態系のうちに入る。谷床の環境に適応した動植物は貯水池の岸で生き残れないことが多い。（中略）貯水池は動植物の生存環境を破壊するだけでなく、溪谷を横切ったり川沿いを通る移動ルートを断ち切ることにともなる。これにより種の集団が孤立する。こうして生態系が分割され、同種繁殖の危険性を招くことにともなる」¹²⁶。

125 BERG 2000, p.3

126 *Silenced Rivers: The Ecology and Politics of Large Dams*, Patrick McCully, 2001, p.32. (訳注) パトリック・マッカリー「沈黙の川——ダムと人権・環境問題」鷲見一夫訳、築地書館。

第4章 結論と勧告

©ディーン・チャップマン



結論と勧告

第1節 結論

ビルマ軍事政権は権力維持を目的に、その資金源となる外貨の獲得を目指している。軍政にとってダム建設には二重のメリットがある。まず生産される電力を輸出すれば収入が得られる。またダム建設地を警備の対象とすることで、紛争地域での軍事支配を拡大することができる。しかし、軍政にとってのメリットは、カレンニーの人々にとっては苦難に他ならず、すでに荒らされた故郷がさらに破壊されることでしかない。ウェイジーダムによってできる貯水池は、肥沃な農地、多様な生物が住む森林、文化的に価値のある遺跡を水没させ、漁場を消失させ、交易と運送経路を分断するだけでなく、約3万人を住み慣れた土地から追放することになる。・カレンニーの人々は再び、「開発」から利益を得ることなく、今回は遠く離れたタイの消費者へ電力を送るために犠牲になる。サルウィン川ダム計画に関わるビルマ軍政とタイや中国の共同事業者らは、地元のカレンニーの住民の合意を得るどころか計画について住民に知らせてさえいない。カレンニーの視点からすれば、サルウィン川流域での「開発」は約50年前から行われてきたように今後も続き、状況はさらに悪化するだろう。「開発」事業は、地元住民の合意のないまま進められる。住民に利益はもたらさず、天然資源も保護されず、基本的人権も保障されないまま進行していくだろう。

第2節 勧告

タイ政府へ

- ・ サルウィン川でのダム建設をはじめとした、ビルマ軍政とのすべての共同開発計画をただちに中止すること。バルーチャウン発電建設事業の影響を受けたカレンニーの人々が約50年に渡り身をもって経験してきたように、軍政の事業が深刻な人権侵害をさらに引き起こし、地元住民に何の利益をもたらさないことは目に見えている。
- ・ 投資、融資、開発援助などの一切の援助を中止すること。こうした援助はビルマの軍事独裁体制を政治的に正当化し、ビルマ国民の抑圧を続けさせる要因となる。
- ・ タイにいるビルマからの難民全員を保護し、人道的支援を行うこと。また、ビルマに真の平和をもたらす難民が故郷に戻るようになるため、ビルマの民主化改革と国民和解を進める努力を一層強めること。

海外の投資家と、二国間および多国間開発機関へ

- ・ サルウィン川ダム建設計画に、一切の資金を投じないこと。同計画は、半世紀におよぶ内戦により既に痛めつけられている諸民族を追放し、さらなる人権侵害を引き起こす。また、軍事政権に収入をもたらす、権力の保持を助長することになる。

ビルマ軍事政権へ

- ウェイジーダムをはじめとするサルウィン川でのダム建設計画を中止すること。ウェイジーダムが建設されれば、カレンニエの文化遺産、インタレーの土地全域を含むカレンニエの故郷が水没し、稀少な生物多様性をもつ地域が取り返しのつかない打撃を受ける。
- ただちに軍事行動を停止し、村の強制移住、民間人への攻撃や追放、超法規的殺害、性暴力、強制労働、住居や所有物の焼き討ちなどの人権侵害をやめ、兵士を撤退させること。
- 真の平和と民主主義をビルマにもたらすため、国民民主連盟（NLD）と諸民族勢力との三者対話をただちに開始すること。



ビルマ軍政下のダム開発

カレンニーの教訓、バルーチャウンからサルウィンへ

ビルマで最初にできた大型水力発電所は、カレンニー州を流れるバルーチャウン川にあるロピータ滝に建設された。事業が開始されてからおよそ 50 年が経つが、現地の人々は約束された電力や灌漑設備を得ることなく、事業により土地を迫られている。ビルマ軍政下での開発とはこのようなものだ。水力発電所を警備するために軍隊が増強され、強制移住が命じられ、何千もの地雷が埋設され、強制労働、性暴力が発生している。またダムにより農地や森林が洪水に見舞われ、魚の棲息環境が破壊された。

サルウィン川は、ダムのない川としては東南アジアでもっとも長い川だ。ビルマ軍政の将軍たちは今、隣接するタイと中国と共同でこの川に複数のダムを建設しようと躍起になっている。そのうちの一つ、ウェイジーダムができれば、稀少な低地農園、未調査だが生物多様性が豊かなことで知られる森林、文化的遺産などを含むカレンニー州全土の 6% 近くが水没してしまう。28 の村と町が完全に水没し、世界でもっとも長い内戦が生み出してきた難民は、故郷に帰ることができなくなる。わずか 1,000 人しか残っていないインタレー民族は、上昇する水位により住み慣れた土地から逃げ出さなければならず、先祖から受けついだ神聖な土地を永久に失うことになるだろう。

「緑の精霊の地から (From the Land of Green Ghosts)」の著者、パスカルクートウェ氏は、序文で次のように述べている。「ダム建設に影響力を持つ人々、また事態を憂慮する人々は、この報告書を読み、手遅れになる前に理不尽な破壊行為を控えるべきだ。破壊をもたらすダムを建設し、神聖な母なる川、サルウィン川を殺さないでほしい」。